特233
394

讀本 第三編

子供の躾方

京都市兒童院

始

特233
394

帝國圖書館藏

母親讀本　第三編

子供の躾方

京都市兒童院

昭和7年 帝國圖書館藏

序

此の書は乳兒及び幼兒の躾け方について述べたものであります。

第一編は園原文學士第二編は田寺文學士の執筆によるものであります。

第一編は子供の發達に應じた躾け方一般を述べ、第二編では普通子供によく起る問題を取り上げて、その取扱ひ方を說明しました。

第一編の第一、第二章に於ける項目の採り方は大體ウキンのヘツツエル女史の「精神衛生」と云ふ本の體裁に倣ひ、第二編は米國の勞働省兒童局編纂の「子供の取扱ひ方」と云ふパンフレツトに據つて書いたことを斷つて置きます。

此の書がお母樣方の參考になれば幸甚であります。

昭和十一年三月

編者識す

子供の躾方

目次

第一編　子供の發達と育兒上の注意……一
緒　現代生活と育兒上の注意……一
第一章　乳　兒……六
一、睡眠と安靜……六
二、習　慣……七
三、遊戯及玩具……九
四、乳兒の發達に影響を及ぼす事情……一二
第二章　生後第二年目及び第三年目……一四
一、遊　戯……一五
二、言　語……一九
三、遊び友達……二一
四、いひつけと服從……二三
五、强　情……二五

第三章　生後第四年目から就學まで……二九
一、幼兒の社會性……三一
二、幼兒の遊び……三六
三、幼兒の知的活動……四〇
四、幼兒の質問……四五
五、幼兒の想像……四七
六、幼兒の感情生活……四九
七、幼兒の不良行爲……五四
第二編　子供によく起る問題……五七
第一章　躾方について……五七
第二章　習慣……六三
第三章　食事の躾け……六八
第四章　子供の嫉妬……七四
第五章　子供の恐怖……八〇
第六章　子供の怒……八六
第七章　子供の虚言……九三
第八章　いふことをきかぬ子供……九八

子供の躾方

第一編　子供の發達と育兒上の注意

緒　現代生活と育兒上の注意

文明の進歩は樣々の恩惠を人々の生活に齎した。世の中が便利になり、生産能力が增加し、人間は危險や疾病から護られ、人々の生活は益々安全幸福になつて來た。子供を育てる上に於ても種々な便利が齎され、文明人として恥しからぬ教養を容易に子供に與へることが出來るやうになつてゐる。

併し、子供を育てる上に於ては、特に文明の進歩に伴ふ害惡の方面にも注意し、その弊に陷らぬやうに心懸ける必要がある。この點を最初に强く申上げて置き度い。

一、育兒の根幹は心身の力の鍛錬にある。このことを心に留めて置いて頂き度い。文明の進歩に伴つて世の中が益々便利となり、自分を勞せずして種々安樂な生活を營むことが出來るやうになつて來るが、併し人間の進歩發達は困難なことにぶつかり之を克服して行く所にあり、それに

よつて體力知力意力が鍛錬されるのであるから、如何に文明が進歩し生活が便利になるからと言つて、心身の錬磨を怠るならば人間は墮落腐敗してしまふ。そしてその危險は文明が進歩すればする程著しい。殊に子供は、常に相當の困難を經驗しつゝそれによつて心身の力を磨いて行かねばならぬのであるから、子供の周圍を餘りに便利にし過ぎたり、餘りに外から世話をやきすぎたりすることは、非常に宜しくないことである。現今は、子供の心に媚びる玩具や繪本、子供を誘惑する便利な乘物や道具等が非常に夥しくなるし、又子供に對する世話の仕方、育兒の方法等も非常に行屆いて來たのであるが、子供の時から餘り便利に慣れ、苦痛を知らず、世話を燒かれすぎてゐると、子供は遂に身心の鍛錬の機會を持たず、我儘な脆弱な者となつてしまふ。

二、子供を育てる環境はなるべく簡素な方がよい。子供の心は未だ不十分なもので、種々の經驗を經て一人前のものに發達しなければならぬものであるから、初めから餘り文明の進んだ贅澤な生活環境に置かれることは、子供の發達のために宜しくない。かやうな環境に於ける子供の經驗は眞に子供の心に徹するやうな印象とならず、從つて表面的な輕薄なものに止まり易い。即ち子供に底力を貯へさす餘裕のないものとなる。子供に與へる菓子等はなるべく母親の手製のもの の方が望ましく、子供に與へる玩具は極く簡單な仕掛けのものがよい。子供の部屋、子供の寢室

等も、總べてなるべく質素な簡單なものとして、よく子供に適當した子供の生活を經驗せしめ自然の中に心身を練るやうに心懸け度いものである。

三、子供に對しては親が餘り臆病にならぬことが大切である。子供の心の成長に於ては周圍からの感化が最も大きな影響をもつてゐる。而も子供の心に餘り細かい恐怖を感染さすことは、發達上非常に害がある。然るに、文明が進むにつれ、種々知識が澤山となり、親は種々な場合について非常に多くを知つてゐるため、あゝでないかかうでないかと、兎角非常に不安を抱き易いものである。昔の人が常に戰々兢々としてゐたやうな天災外敵等に對する恐怖は、文明の進歩に伴つて頗る薄いでゐるけれども、その半面に現代人は澤山の病氣を知り澤山の危險を知り澤山の煩悶を知つてゐるだけ、それだけ又昔の人の恐れなかつた恐れを餘計に抱くやうになつてゐる。而もその多くが知識に基く恐れであるので、起るかも知れぬことに對する不安が多く、そのため著しく神經を勞して臆病となり勝ちである。親のかやうな態度は子供に直ぐ感染し、現代の兒童に神經質的傾向のものゝ多い有力な一原因となつてゐる。內心に於て如何に細かく子供の事に關して氣を遣つてゐても、子供に對しては大膽明朗な態度を以て臨むことが、現代の生活に於ては極めて必要である。

四、概して今日の都會生活に於ては、子供にとつては激しすぎる人工的な刺戟が多すぎる といふことを心に置いてゐて頂き度い。光や音に於ても味や香ひに於ても、段々と強烈なものが多くなつて來る。のみならず人々の生活態度も何か常にいら〳〵してゐて、子供の心をのんびりさせるといふ方面が段々無くなつてくる。そのために子供の神經が過度に勞しすぎたり、次から次へと刺戟に迫はれて注意が散漫になつたりする傾向を生ずるに至る。文化の進んだ世の中に於ては、子供の見るべきもの學ぶべきものは頗る多くなつてゐるが、未だそれに堪へ得るだけの力がついてゐない子供を、餘りに早くから、又餘りに多くの種々な強い刺戟の中に置くことは心身の發達にとつて甚だ有害である。殊に世の中には、必ずしも子供にとつて必要なものばかりあるわけでなく、不必要なもの否却つて有害なものも多いのであるから、さういふ刺戟をなるべく子供の周圍から遠ざけることが肝要である。

このやうに文明の進歩は、一方に於ては極めて多くの幸福を人生に齎し、人をして無駄な勞力を費さず、必要な仕事や修養に力を盡すことが出來るやうになつて來るが、その半面には子供の鍛錬の機會が乏しくなつたり、或は人工的な刺戟が多すぎて神經質の傾向に陷らしめたりする害も相當大きいのであることを忘れないやうにしてほしい。

所で子供の體力知力意力等の成長發達の根本となるものは、子供の天性に具つてゐる素質の良否であつて、之は如何ともすることが出來ない。生れつき生活力の旺盛な抵抗力の強い子供もあれば、天性蒲柳の質の子供もある。先天的は優秀な知力を具へてゐる子供もあれば、先天的に知力の劣つたものもある。斯樣な先天的な素質も後天的な鍛錬や教育によつて或程度鍛へ直すことは出來るが、併し天分の差まで變へでしまふといふことは先づ出來ないことである。

從つて子供によつて困難に堪へ得る能力に初めから差別がある。弱い子供に無理な鍛錬を強ひると、抵抗力を強めることにならず却つて抵抗力を失つてしまふやうな結果に陷る。或は生れつき知力の劣つてゐる子供に無理な勉強を強ひると、種々の害惡が身體上精神上に現はれてくる。故に子供の發達には鍛錬が大切であるとはいへ、夫々の子供によつて夫々程度といふものがあることを忘れてはならない。

子供各自の素質によつて鍛錬の程度に差があると共に、子供の成長の時期に應じても亦夫々鍛錬に順序のあることを考へなければ失敗する。子供に少しも困難を與へぬやうに世話を燒きすぎて居れば、全然心身の力が鍛へられないけれども、幼い子供の體力や知力として到底出來さうもないことを餘り早くから強ひるならば、必ず子供を害してしまふ。之が育兒上最もむつかしい所

で、子供の成長に應じた鍛へ方をするやうにしないと、却つて餘計な手出しをしなかつた方がよかつたといふ結果になることが尠くない。

子供の鍛錬は外から種々な困難を與へて之に對する抵抗力を養つて行くと共に、內からの燃料も十分に與へるやうにしなければならぬ。即ち必要なる食慾の滿足、必要なる感情的滿足等を十分滿たしてやつて、子供の內部からの生活力を旺盛にしてやらなければ、何如に外からの訓練のみに注意してゐても、何にもならないのである。殊に子供が幼ければ幼い程、自然の成長を養護するといふ方面が大切であることを忘れてはならぬ。

第一章　乳　　兒

生後約一年間を乳兒期といふ。この時期では赤兒の發達は殆んど身體の成長に伴ふのであるから、榮養を十分に與へ睡眠と安靜とを妨げぬやうにし、なるべく赤兒の自然の欲求に從ひ、又環境も餘り人工的になり過ぎぬやうに特に注意しなければならぬ。

一　睡眠と安靜　生後四週間乃至六週間までは、赤兒には特に安靜が必要であるから、餘り構ひすぎて赤兒の安靜を妨げることのないやうにしなければならぬ。又餘り騷しすぎる環境や明る

過ぎる部屋は、赤兒の安靜上よくないけれども、赤兒の眠つてゐる側では聲一つ立てず、歩くのにも忍び足でし、部屋も殊更に薄暗くするなどの如く、人爲的に態とあらゆる音を光を少くしてしまふことは却つてよくない。日常の生活にとつて極く自然な音や光は、赤兒にもやはり必要だといはねばならない。

赤兒が三四ケ月になると、次第に目覺めてゐる時間が多くなるが、目覺てゐても矢張り赤兒を安靜にさせて置くことが必要である。赤兒はぢつとして何かを見、何かを聽いてゐるので、その間に自ら感覺が發達するのであるから、ぢつとしてゐるのを退屈してゐるのだと思つて、無理に音や光に注意をむけさせやうと側から刺戟するのはよくない。

二　習慣　赤兒を規則的に育てることは大切であるが、それも餘り人工的になり過ぎてはいけない。授乳時間は何分と定めてあるからといつて、母親の乳の分泌量を考へず赤兒がまだ飲み足らぬのに時間が來たら止めてしまつたり、四時間毎に與へるといつて、空腹で泣き叫んでゐる子供を時間まで放置して置くなどの如きは、大いに考へものである。大體に於て、赤兒は初めの間は赤兒自身極めて規則的なものであつて、身體に惡い所さへなければ、赤兒が自然に欲するまゝに任せて置いても、規則的な生活が亂れることなく、差支へないものである場合が多い。

赤兒の泣癖や臆病の如き習慣は、餘り赤兒を泣かせまいとしたり、餘り用心をし過ぎて必要な刺戟をも取除き過ぎたことから起るものが尠くない。寒いだらうからといつて無暗みに厚着をさせ過ぎ、泣くからといつてすぐ乳を與へ、始終乳豆を銜へさせ、或はすぐ抱上げて搖ぶり、又は前に述べた如き人工的な靜寂の中で子供を育てると、その子供は抵抗力が乏しいから、怖ぢ易くなり、又僅かな事で泣き易くなる傾向がある。泣くといふことは或程度赤兒に必要なことで、着物の調節が悪く暑すぎたり寒むすぎたり、或は小便や大便をして不快であつたり、又は疼痛を覺えたり、或は空腹などのために、泣くのでなければ、大體に於て赤兒は放置して置いて差支へないといはれてゐる。

物に慣れて習慣がつくのは、かなり早くから現れるけれども、物眞似の力は未だ生後一年間は強くないので、手本を示し之に赤兒を從はせて習慣づけることは全く不可能といつてよい。赤兒は全く自分の本能に從ひ自分の慾望のまゝに行動するのであるから、もし何かの習慣をつけやうとするには、之を制するより外はない。乍併、赤兒には未だ何故制せられるのかを理解する力は少しもないのであるから、やはり何度もその度毎に制して赤兒を慣らすより外に習慣をつけることは出來ない。生後一年の終頃には、便をしたい時之を何等かの仕方で大人に知らせて垂れ流しにならぬ習慣と、大人の制止が多少効果をもつ習慣とが、或程度出來てゐてほしいのであるが、それには親が根氣よく赤兒を之に慣れさせねばならぬ。

一年の終頃は、赤兒の神經の働きが著しく發達して今までに比してかなり痛高くなるのと、物覺えが相當出來るやうになるのと兩方の理由から、餘り親が神經質過ぎると、之が赤兒に移つて子供も大變神經質的になり易いから注意しなければならぬ。

三　遊戯及び玩具　遊ぶことは子供の娯樂ではなく、子供の精神活動の殆んどすべてであるといつても差支へないほどのものである。遊んでゐる間に子供は種(いろ)んなことを覺え、身體や精神の力を練つて行くのであるから、子供の生活には極めて大切な意味をもつてゐる。

赤兒は生れて一ケ月程の間は、前述の如く殆んど眠つてばかりゐるのであり、外部から餘計な刺戟を與へてその安靜を妨げるのはよくないことであるが、生後二ケ月乃至三ケ月頃になると、餘程目覺めてゐる時間が多くなり外部から適當な色や音を與へて之を眺めさせ又聽いて樂しませることが必要となつてくる。

赤兒の遊びの中最も大切なものは、自分の身體を動かしたり、手を摑んで見たり聲を出して見たりする遊びで、之は生後二ケ月の赤兒がもうやり初めてゐる。隨つて餘り澤山着物をきせたり

餘り縛り過ぎたりして、そのために赤兒が自由に動き得ない如きは避けなければならぬ。生後半年も經つて、そろ〳〵赤兒が位置の移動（七ケ月頃は未だ匍ふのではなく、腹這から横に轉回して位置の移動をするか、或は腹這つてゐて、するやうにして前後左右に動くのである）をなし得るやうになつたら、なるべく身體の自由がきくやうにして疊の上に放置して置くのがよい。九ケ月乃至十ケ月頃には獨りで坐り得るやうになるし、十一ケ月頃になると物に掴つて一人で立上り得るやうになる。物に掴つて立上る努力は約一ケ月程前から初まるから、適當な机、臺、格子の如きものを與へて補助するがよい。この頃になつても未だ抱いてのみゐると、立上るのが相當遲れる。少し高價であるが赤兒用の椅子が買與へられたら大變有効である。但し、この頃の赤兒は疲れたらすぐ位置や姿勢を變へることが出來ないといけぬので、子供用の椅子の如きに坐らせて置くのは未だ赤兒には早過ぎる。

二ケ月の中頃からは赤兒に適當な玩具を與へねばならぬ。二ケ月乃至五ケ月の赤兒は眺めることが主であるから、玩具も色が美しくて天井から吊下げて置ける飾り玉の如きものがよい。ゼンマイ仕掛けで急速に廻るやうなものは六ケ月未滿の赤兒にはよくないが風が吹けば自然に廻り、且和かな音の出る種類のものなどは非常によい。四ケ月頃からは赤兒は音に對してかなり敏感になり且音のする方へ頭をむけることが出來るので、美しい音の出る風鈴は常に赤兒を慰めるものである。

四ケ月經つた頃には赤兒はもうガラ〳〵を渡されると確り握つて自分で打振り或は握りかへ或は眺めて樂しみ、六ケ月目頃になるとガラ〳〵を見つけると自分で取り、赤兒が持つてゐる玩具を急に取去ると顏を顰めたり泣いたりして明かに不快を現すほどになつてゐる。この頃になると赤兒には單に眺めたり聽いたりするのみの玩具でなく、掴み得る玩具が必要である。ガラ〳〵、ゴム人形、布裂れ、匙、小さな箸箱の如きものが喜ばれる。いふまでもないが、赤兒は掴んだものをすぐ口へもつて行くから、玩具はセルロイド、上等のゴム又は木製或はアルマイト製のものがよく、又重過ぎたり大き過ぎたり、Cはいけない。

九ケ月頃になると、指先きが相當器用になつて巧みに茶碗の蓋を裏返し、極く小さいものを掴む。又引張ることを面白がり、紙を破り玩具の人形の手を引張り、簞笥や机の抽出しの鍔を弄び之を引張る。この頃の子供によい玩具は、少し高價であるがドイツ製の動物の玩具（立毛製で頭が動かし得るやうになつてゐる。近頃日本でも段々出來て來たが、値段はやはり相當高いのが殘念である）や、手、足、頸を強いゴムで結びつけたセルロイド又は木製の人形或は動物の玩具等

である。又近頃賣出されたものであるが、木製の球をいくつも團子のやうに強いゴム紐に通しそれで人の形に作つたもの等も、引張るのに都合がよくて面白い。

十ケ月、十一ケ月になれば徐々に動く玩具、即ち車やゴム鞠の如きものが入用になる。之はお誕生が過ぎて立歩き出來る頃になつても役に立つ。

すべて玩具の取扱ひは赤兒の好きなまゝに任せて置くべきで、未だ生後一年の間では無理に眞似させることは不可能であり避けねばならぬ。

四　乳兒の發達に影響を及ぼす事情　赤兒によつて發達に遲速や差異のあるのは當然のことであるが、種々の原因のため相當著しい遲滯が起る場合がある。その原因の主なるものを擧げると次の如きものがある。

イ、先天的障碍、遺傳的に缺陷をもつてゐる場合で、親の酒精中毒、黴毒、精神病的缺陷、等の惡影響が子供に傳り、子供が生れながらにして身體や精神の力の劣つてゐることがある。又兩親には何等の缺點がなくても、その血統の中に劣惡な素質が流れてゐて、突然子供に現れる場合もある。斯樣な先天的に障碍のある赤兒は、大體に於て生れた時から脆弱であつて、乳を吸ふ力も弱く且拙劣なものが多い。頸や腰が坐るのも、齒が生えるのも立上るのも、正常の子供に比して非常に遲れ、物を摑む力も外界に對する興味も甚だ薄弱である。斯る子供の智力を乳兒の間に增進させることは全く不可能である。

先天的障碍の一つとして、生れつき目や耳に故障のあるものも時々ある。かゝる子供は外界に對する興味が六ケ月になつても九ケ月になつても現れない。

ロ、疾患、先天的障害のため發達が遲れる場合は比較的稀にしか現れぬが、姙娠中の障碍、出產時の外傷、乳兒期に於ける病氣殊に所謂腦膜炎等のために、發達の遲れる場合は相當多い。其他榮養不良も亦乳兒の發達に大なる支障を來すことがある。乳兒期の發達は他の何れの時期よりも身體と密接な關係にあるのであるから、身體を養護し健全な身體的發達をさせれば精神方面の發達も亦盛となるのである。

ハ、周圍の者の無關心、子供を育てるのに餘り周圍の者が世話を燒き過ぎ、子供の働きを鍛へるために必要な障碍物や自然の刺戟を取除いてしまふことは、子供に有害であることを述べたが、その反對に、周圍の者が餘りに赤兒に對して無關心で、赤兒の發達に必要な事柄を考へてやらぬと、そのために赤兒の發達が大變遲れることがある。例へば、いつまで經つても赤兒をおくるみにしつかり包み手足の自由がきかないまゝにして置いたり、適當な玩具を少しも與へなかつ

たり、大人が少しも構つてやらなかつたりするのは、乳兒の發達のために非常によくない。或學者の調べた所では、斯樣に周圍の者の注意の足りない環境で育つた子供は、よく見守つて育てられた子供に比べて一年の終りには約一ケ月も發達が遲れてゐた。この頃の一ケ月の差は相當大きな差であるといはなければならぬ。

第二章　生後第二年目及び第三年目

生後一年目の終頃から赤兒の心身は餘程確りして來て、物に摑つて歩く運動も隨分速くなり、物の見分け、物眞似、物覺え等相當はつきり認められるやうになるが、初誕生を過ぎて數ケ月經つと、赤兒は初めて獨りで立つて歩き出し、二三の言葉も用ひ得るほどに進歩して來る。物の意味が分り出すので、子供の智慧附きは一日毎に目立つて來るが、それと共に子供の我も次第に强くなつて來て、段々と取扱ひ難くなる。而も子供の發達から考へるとこの時期の育て方の如何が後年の性格に相當重大な影響をもつものであることは疑ないのであるから、親達の注意が必要である。但し特に留意してゐて頂き度いのは、この頃の子供には心身を盛に活動せしめて大いに遊ぶことが最も大切なのであり、それによつて子供は旺に成長するのであるから、餘り早くから行儀作法に拘泥して心身の活動をいぢけさせることのないやうにしてほしいことである。

一　遊戯　初めて立歩き出來る時期は、子供によつて夫々異り一定してゐないが、大體一年三四ケ月頃とされてゐる。子供の脚が十分强くなり身體の平衡がとれるやうになると、子供は自ら獨りで歩くやうになるのであるから、餘り早くから手をひつぱつたり、歩行機を用ひたりして强ひて歩かせやうとしないのがよいが、子供の傳ひあるきが行はれるやうになつたら厚着や緊縛を控へてなるべく身體の自由がきくやうにし、又なるべく活潑に自由につたひ歩きの出來る機會を多くするがよい。早い子供は十一ケ月頃からもう歩き得るやうになるものもあるが、遲い子は三年經つても四年經つても歩かれぬものもある。このやうに餘り立歩きの遲れるものは一般に智能の發達の遲い子供に多いが、普通二三ケ月位の早い遲いは子供によつてあることであるから、餘り氣にしなくてもよい。

立歩き出來るやうになつた子供には、身輕にしてやり、又危險な障碍物を取除いて自由に歩き得るやうにしてやることが大切である。併しその半面、座布團や闘の如き一寸した障碍物は寧ろそのまゝにして置く方がよいし、又家具等も危險のない限りなるべくその儘にして置いて、子供をしてかゝる障碍物に打克ち、又日常生活の狀況に慣れ、行つてよい場所といけない場所との區

別を覺えるやうにさせることが必要である。

子供が歩き得るやうになると、遊び場所の範圍が非常に廣くなる。天氣のよい時はなるべく戸外の芝生や砂場で遊ばせるのがよい。玩具としては、歩き初めには紐で引張り又は押して歩ける米搗き車の如きものが非常によい。

滿一年半頃から滿二歳頃になると、もう今までのやうに何でも手當り次第に掴んだり投げたりすることがなくなり、靜かに音を聽いたり繪本を見たりしてゐることが出來るやうになる。從つて繪本や蓄音機を非常に喜ぶやうになる。お誕生頃でも繪を好むものもあるが、それはまだ物の意味が分らず只描いてある色や形を喜ぶのであるが、二年目の終頃になると、見るもの聞くものが多少理解出來、繪や言葉の意味が分つて來るのである。初めに與へる繪本としてはなるべく馬なら馬、電車なら電車が、背景なしにはつきり描いてあるものがよい。近頃は無數の繪本が市場に出てゐるが、選擇に注意を拂ふことが大切であり且一時に澤山與へないやうにしてほしい。繪本の選擇の標準は、(1) ゴテ〳〵しないで明確なもの、(2) 美的趣味を缺かないこと、但し餘り藝術的な象徴的な繪は無意味である。(3) 子供の日常生活に比較的接近してゐる題材、(4) 紙質は極く上等でなくてもよいが餘り破れ易いのは不可等。蓄音機も與へられゝば與へ度いものであ

る。音樂は歌詞の簡單で解り易く、旋律も簡單で明朗で、拍子もはつきりしてゐてテンポの無暗みに速くないのがよい。

生後一年の終頃から生後二年目を通じて子供は極めて大きな音を出して喜ぶ傾向が現れて親達を吃驚させるが、之は極く自然の經過で決して性格に異常な所がある故ではない。寧ろ健康で元氣のよい子供程かゝる傾向が著しい。

生後二年目の終頃から子供が物の意味を理解し出すと今度は自分のする事に意味をつけて、犬になつたり人形になつたりして遊ぶ遊びが初まる。自分のみではなく周圍にある物も何かの役割をもつて子供の遊びの中に加へられる。机が犬小屋になり布團が山になる、さういふ風にして所謂ゴツコ遊びが始つてくる。學校ごつこ、電車ごつこ、兵隊ごつこ、まゝごと、お客樣ごつこ等が、滿二歳以後幼稚園の時期を通じて最も子供に喜ばれる遊びとなり、之につれて今迄とは違つて遊戯が團體的となつて行く。かうなつてくると子供は出來上つた玩具を動かしたり眺めたりするだけでは滿足出來ないので、種々の自然物例へば泥、砂、木葉、木片、石、草花等を利用して自分で遊びの道具を作出す。そしてそれが又子供の發達上頗る有用な事柄であつて、この間に子供が種々工夫力を練つて行くとも言ひ得る。この頃の子供に與へる玩具はなるべく既製品を避けて、

それよりも道具に近いもの、例へば砂掘り道具、粘土細工、箱庭道具、まゝごと道具等が適當である。或はブランコ、動く木馬、三輪車等の運動具がよい。

之に伴つて子供には物を組立てたり繪を畫いたり紙を折つたりする興味が非常に盛になつてくる。之は生後三年目頃に一時强く現れその後暫く中絶し、幼稚園へ行く頃になつて再び現れてくるのが普通である。生後一年前後の赤兒も小さい積木をもつて遊ぶけれどもそれは只弄ぶといふだけで何を作るといふあてもなく、又出來たものにも少しも興味をもたない。所が生後二年目の後半頃になると、自分の作つたものを注意深く眺めるやうになり、生後三年目頃になると作つたものに名前を附するやうになる。この頃の子供は大體に於て、何を作らうといふ意圖の下に積木を積んだり繪を描いたりするのではない。初めは單に積むことや鉛筆でなぐり描きするのが面白いのみで、その興にかられて描いたり作つたりしたものに、あとから勝手に名前をつけるのが普通である。繪でいへば所謂搔畫(引つ搔き畫)の時代に相當するもので、電車でも馬でも犬でも何を描くにも只紙の上を鉛筆で引つ搔き廻して滿足してゐる。少し成長すると線を引つ搔き廻してゐる間に偶然何かの形に似たものが出來るとその名前をつけたりするのである。大體滿四歳五歳位になり以前とは違つて大分そのものらしい形が描けるやうになつて初めて豫め何を描くと考へて描き初めるのである。故に生後三年目位の子供が積木や繪を喜ぶやうになつても、なるべく彼等の勝手にさせて置くのがよい。子供は自分では出鱈目のものを作りながら、親には正しい形正しい繪を作つてくれるやうに要求するが、大人は自分の作つたものを子供に描いて眞似させやうとしてはいけない。

附言して置くが、積木はなるべく大きな輕いものがよく、年齢の進むにつれて少し宛複雜な形のものを混へるとよい。

二　言語　前述の通り、子供が言葉を用ひ得るやうになることは、歩行と共に生後二年目に於て子供が示す最も著しい進歩である。

言葉を覺え之を使用するには、隨分複雜且高等な働きが必要なのであるから、智能の劣つた子供は初めて言葉を用ひ出す時期が普通より遲れ、甚しいのは四五歳乃至十歳頃にならねば言葉の出ないものもある。初めて言葉を用ひ出す時期は初めて歩き出す時期よりも一層一定し難く、且つ一つ二つの言葉は隨分早くから言へたにも拘らず其後一向言葉が增加しなかつたり、初めて用ひ出すのは相當遲れたが、初めの一語が出來ると共に急速に語數が增して行つたりすることはよくあることなので、尙更その時期を定めることが困難である。

併し大體に於て生後一年三ケ月頃までには、「起きなさい」「ねんねなさい」「おいで〳〵」「頂戴」等の簡單な要求を、身振りや手振りでなく言葉によつて理解し之に應じることが出來、又一年半頃までには言葉による簡單な禁止を理解して之に應じることが出來るのを普通とされてゐる。子供は自分では使用出來なくても、その前にこの位の言葉を理解してゐる。斯る意味の理解、もつと正確に言へば言葉に應じてそれに適當した動作をなし得ることが出來るやうになつてゐないと、言葉を用ひることは出來ない。

同時にその前に子供は自分で發音の練習をしてゐなければならない。それは大人の言葉の摸倣である。

初めは泣聲しか出せなかつた子供の發音は、成長と共に次第に種々な音を出し得るやうになるが、滿一年前後になつて摸倣が盛になると、大人や兄姉の言葉を眞似るやうになる。大人が眞似させやうとして眞似させる時もあるが、子供が何時の間にか「聞き覺え」で眞似るものもある。

かゝる眞似によつて或發音が子供のものとなり、大人の言葉の意味が次第に了解されるやうになつて始めて言葉を使用し得るやうになるのであるから、通常言葉の使用は、その意味の理解よりも一二ケ月遲れて現はれる。よく母親の中には、子供の單なる摸倣語を言葉の言ひ始めだと誤解してゐる人がある。併し本當にその語を用ひうるのは尙二三ケ月後である。又子供が言葉の意味の理解に費してゐる期間は少しも新しい言葉が增さぬので、それを常に憂慮して新しい言葉を敎へやうと苦心してゐる人も往々見うける。併し最初の言葉が一二出來てから後次の言葉が出來るまでには一二ケ月少しも新しい言葉の增さぬ時期を經過するのが普通で、その一二ケ月が經つと急に澤山の言葉を言ひ出し又停滯するといふのが通例である。初めて言葉の出來る時期に多少の遲速のあるのは當然のことであるから、餘り憂慮し過ぎない方がよく、又一時に澤山の言葉を眞似させやうとしない方がよい。

子供の言葉は大人の言葉を眞似るのが基礎であるから、この時期に餘り大人と接觸しない子供は大體に於て言葉の出來るのが遲く、姉や兄の多い子供は一般に早いやうである。又子供の發音は大變解りにくゝて慣れた者に對してゞないと言葉の用をなさぬ時もあるから、もし乳母や子守りをつけてゐるなら、この時期には餘り變更しない方がよい。

三　遊び友達

滿二年頃迄は子供の相手には未だ大人の方がよいが、子供が二年半乃至三年位になると同じ年輩のお連れが二三人あつて、それと一緒に遊ぶ機會をもたせたいものである。勿論この年齡頃の幼い子供は大きな子供のやうに皆で一緒に纏つた遊びが出來るわけでなく、只二

三人一緒に居て騒ぎ廻つてゐるのみであるが、それでもこの頃から子供に連れがあるのとないのとでは精神發達上にも又性格上にも相當の影響があるといはねばならぬ。子供は同年輩の友達と或時は自分が大將になり或時は相手に從つて遊んでゐる中に、次第に我儘を抑へ妥協を覺えて行くので、その間に社會性も又道德的な訓練も自ら出來て行くのである。故に、餘りいつまでも同年輩の友達をもたずに親の側につきゝりでゐたり、大人とばかり接觸してゐたりするのは子供の精神發達上宜しくない。特に同胞のない所謂獨りつ子にはなるべく適當な遊び友達を二三人作つてやり、而もいつでも同じ者が大將になるといふやうな關係でなく互ひに大將になりあひをする如き關係に置いてやることが大切である。勿論幼い子供同志の事であるから思慮も足りずお互ひに我も強いので、些細なことからよく喧嘩が起り易い。喧嘩の原因は多くは玩具や場所の取合ひで、負けた方は大聲をあげて泣出し親に助けを求めに行くのが普通である。大人は子供の喧嘩が餘り亂暴に流れぬやう見守つてゐてやる必要はあるが、併し子供の喧嘩に一々口を出して止めだてするのは宜しくない。子供の喧嘩は子供の自己本位の慾望の衝突から起るので子供は喧嘩によつて自然に社會的道德的な秩序を習得し互ひに妥協することを覺えて行くのであるから、寧ろ子供の喧嘩は子供の發達上必要なものである。

四　いひつけと服從

生後一ヶ年間は子供に命令や禁止をしてもその効果はない。子供は只何度も痛い目にあつたりやり損ねたりしてゐる中に或ることをしなくなるに過ぎぬ。併し前述の如く普通の兒童なら生後二年目の半ば頃には、「めんめ!!」といはれると手をひつこめるやうになる。即ち禁止の意味が分るやうになつてくる。同樣に簡單ないひつけならばその意味を了解してその通りすることも出來るやうになる。併し斯樣ないひつけや禁止の効果が相當後まで保持されるのは子供が生後三年目になつてからであつて、それまでは、いひつけた者或は叱つた人が見てゐて子供がその通りするか否かを監視してゐる間しか効果のないのが普通である。隨つて何かの習慣をつけやうと思へば乳兒の場合と同樣に何度もその都度繰返してやらなければならぬ。何分幼い子供を相手にしてゐるのであるから大人の方が根氣よく又腹をたてないやうにし、なるべく寛大にしてやらねばならぬ。

生後第三年目になると、前述の如く一度いはれた命令や禁止が比較的後まで守られるやうになるから、その頃には玩具を片付けたり靴を揃へたりする簡單な規則的な仕事を子供にさせ之を習慣とするのがよい。子供にさせる仕事はなるべく子供が喜び子供の望むやうなことを、子供を勵ましそれをすることに誇りを覺えさせて、やらせるのがよい。

幼い子供に大人の行儀作法を無理に眞似させることは困難であり、又餘り早くからかうすると子供に最も大切な天眞爛漫の野性を失つて妙に大人じみた感情の弱い子供になる恐れがあるから強制してはいけない。併しこの幼い頃からでも人々が協同生活をする以上どうしても必要な事柄には、之に從ひ之に慣れることを覺えさせねばならない。電車の中では大人しくしてゐること、お客樣の寢てゐる側では騷がないこと、公園では樹枝を折らぬこと、はいつてはいけない所にはいらぬこと等は、幼い時からの習慣が大切である。

子供を躾ける場合、有効なのは體罰である。近頃兒童尊重の思想が普及して子供に對する考方が隨分矯正されたが、その結果餘りに子供に對する體罰を惡いものゝやうに考へ過ぎる風も生じて來た。一から十まで悉く鞭で育てるのは子供の心を理解しない慘酷な遣方であるが、さりとて罰することを恐れ只管子供の機嫌のみとつてゐるのも子供に媚び過ぎた仕方であつて、その結果は面白くない。言つて聞かせても分らない頃の子供に、どうしても許されぬことを覺えさせるには體罰によるの他はない。子供が自然に我儘を制御し秩序に從つて行くのも、遊戯中我儘をして友達に毆られたり、熟しないものを食つて腹痛を起したり等して直接痛みを覺えるからである。どうしても從はねばならぬことに從はぬ場合には、千萬言を費すより痛い目に逢はせるべきである。罰として食を與へなかつたり、暗闇みの中に閉ぢこめたりするのは、却つて子供の性格をひねくらせ或はいぢけさせるから宜しくない。但し體罰は餘り屢々與へては効果がなくなるし、又親の勝手な氣分から罰するのでは無意味である。親も子供も共に從はねばならぬ社會的秩序に從はせるためでなければならぬ。さうしてゐる中に子供は親が叱るから或ることを爲さぬのではなく、してはいけないからしないのだといふことを覺えて行く。生後二ケ年程の間はなるべく子供を自由に放任して置くのがよいが、二年目の終頃からはそろ〳〵かやうな躾けを初めねばならぬ。

五　強情　生後三年目の中頃になると、子供は一般に非常に強情になつてくる。今までは比較的親の思ふ通りになつてゐた子供が俄かに「いやだ」と強情を張るやうになり、或は故意に親の言ひつけとは反對のことをするやうになる。それと同時に出來もせぬくせに何でも自分でするといつてきかず、親達をてこずらせるやうになる。その最も著しいのは生後三年目の中頃から四年目にかけての數ケ月間で、この間を強情期と呼ぶ學者さへある。

子供が斯く強情になつてくるのは精神上の大きな進歩なのであつて、憂慮する必要は少しもない。それは子供の意志が發達するに伴つて現れる自然の現象である。外國の或學者の說によると

この時期に餘り溫しい子供の大部分（八十九％）は小學校にはいる時に著しい意志薄弱を示すといはれてゐる。それであるからこの時期の强情を餘り抑制し過ぎると弱々しい意氣地なしになつてしまふ恐れがある。この時期にいくらやんちやでも二三年經つと見違へるやうに順溫しくなる者が多いのであるから、この强情は無暗みに抑壓せずに見守つてゐる方がよい。

何故子供はこんなに强情になるかといへば、それは一言でいへば子供が意志の持主になるからである。自分といふものが出來てきて自尊心が强くなつて來るからである。今までゞも子供は欲しいものに對する慾求は持つてゐたけれども、それは例へば腹が減つたから食物が欲しいとか目の前に綺麗なものがあるからそれを取り度いといふ極めて自然の欲求であり、それが滿足させられたならば、自づと慾求も解消してしまふ性質のものであつた。所が强情期になると「自分は欲することが出來る」といふことを知つてゐるのである。本當は欲しくなくても欲しいと我を張り得ることを覺えたのである。從つて欲求を拒絶された場合も赤兒の場合とは非常に違ふ。乳汁が欲しくて泣いてゐる赤兒は乳汁が與へられるまで泣き續けるが、乳汁を與へられさへすれば鎭つてしまふ。然るに我を張ることを覺えた子供は、初め菓子が欲しいといつて拒絶されると、たとへ後から菓子を與へられてもそれのみでは滿足せず、拒絶されたことに對して怒り續けるのであ

る。小さい子供ならお辭儀をしなさいといはれると素直に服從出來るが、この頃になると假令自分ではお辭儀をするつもりでゐたのでも、お辭儀をしなさいと禁制されると出來なくなつてしまふのである。即ち子供には我といふものが出來てきて、何でも自分でする或は自分を偉く見せやうといふ欲求が强く、又自分が欲求することが出來るといふことを覺えたので、今までのやうに單純に扱ふことが出來なくなつたのである。强情期といふのは子供がこの新しい能力を用ひるのが非常に愉快なので、事毎に試してみやうとする時期に相當する。從つて欲しくもないのにあれが欲しい之が欲しいと次から次へと要求を發し、その通り行はれるのを見て喜んでゐることもある。子供のこの心理をよく理解して居れば强情期の子供の取扱は比較的容易である。

强情期の子供はよく怒る。それは我が强くなるにも拘らず子供の能力では出來ないことが多く、事毎に欲求が妨げられる場合が多いからである。而も子供は自分の能力の劣つてゐることを自覺せず寧ろ何でも自分が一番の大將にならうと欲するから、之を邪魔するものに出逢ふと非常に怒るのである。子供の時はそれがよいのであつて、餘り早くから自分の弱いことや劣つてゐることを自覺すると人の前では何にも出來なくなつてしまひ、自信を失ひ無氣力となり、精神發達が遲滯するやうになる。子供が種々な新知識を求め、知力を鍛へて行く根本には、この强い自尊

心とそれから子供に特有の強い好奇心とがあり、之に基いてゐるのであるから、餘り子供の我を抑へ、自分は何にも出來ないのだ、自分のすることは皆人に笑はれることだといふ感を強からしめることは子供の發達にとつて非常に有害である。幼少の時から餘りに能力以上のことを強制することは、子供をかういふ狀態に陷れる危險が非常に多い。

併し子供の強情は大いに尊重すべきだといつても、そこには自ら制限があることに注意しなければならぬ。許されぬことは假令強情期であつても許されぬことである。強情期の子供を新しい手本やいひつけに服從させることは出來ないが、前からついてゐた家庭に於ける習慣や社會的な秩序に從ふことは、嚴として維持されねばならぬ。親達が今までのやうに子供のすることに一々氣を配り、あれをしなさいこれはいけないと指圖すると子供は却つて反抗的になるから、そんな細かい事は或程度子供の自由に放任して置いて、大綱だけは確り抑へてゐるやうにしなければならぬ。之は實際上中々困難なことであるが、是からの育兒上最も大切なこつである。言葉でいふ訓戒よりは、親の日常生活に於ける感化が子供に非常に大きな影響を與へる。それが家庭教育の根幹である。

強情期にはいる前に適當な遊び仲間をもつた子供は、強情期になつても友達同志遊んでゐる中に互ひに我儘を制しあつて、極めて自然に統制がとれて行く。強情期を最も無難に過すには同年輩の友達同志で遊ぶことが最もよいとされてゐる。併し今まで友達なしに來て強情期にはいつた子供を、新たに友達の群の中に入れやうとするのは極めて困難で、我儘なるが故に除け者にされ、又その子供も自分の我儘が通らぬので子供の仲間にはいらず大人の側にのみくつゝいてゐる方を喜ぶ。故に子供が歩き得るやうになつたら、なるべく早くから戸外で遊ばせ友達を作つてやることがこの點からいつても緊要である。

第三章　生後第四年目から就學まで

學齡に達する前二三年間を普通に幼兒期といつてゐる。この頃になると子供は自分の慾望を自ら制して規律に從ふことを覺え、前の時期とは見違へる程きゝわけがよくなる。今までのやうなやんちやを言つて親を困らすことはしなくなるが、併しこの頃から子供の行爲には裏が出來て來る。即ち親にかくれて惡い事をし、而も嘘をいつて胡魔化すことも出來るやうになるから、親は今までと同じやうな考へで子供を見ては、監督が行屆かぬことゝなり、そのため種々の惡風に子供が染みる場合が多くなる。子供は表面上は溫しくなるが、併し非常に自己本位の強いことに

は少しも變りなく、自分の慾望を滿足さすことを第一としてゐるのであるから、この點を親はよく理解してゐなければならぬ。もつと幼い間は子供は自分の慾望を滿すのには執拗に母にねだり或は人がゐてもゐなくても自分で取りに行く等して、即ち慾望を直接に行動に現はしてゐたものであるが、もう幼稚園へ行く頃の子供になると相當知力も進んで來るのできういふ簡單な行動の仕方をやらず、その時その場合の事情により或は過去の經驗に基いて、一番有効なそして叱られることの少い仕方を選ぶやうになる。お菓子を貰ふために溫しくしてゐたり、叱られるのが恐しいので嘘をいつたり、友達の間に自分を偉く見せるために家の物を持出したり、種々な手段が多くなつてくる。そのために子供の本當の慾望即ち子供の本心が表面から窺ひ難くなり、親も餘程子供に對しての理解が深くないと子供の表面上の行爲に捉はれ之を大人の考へ方で解釋して子供を賞めたり叱つたりするやうになる。子供は自己本位の慾望が强いことは子供の本性から言つて當然のことであるから、子供のどんな行動も根底に於てはすべて同情すべき性質のものである。只子供の淺い思慮では是非善惡の判斷を正しく行ふことが出來ぬので、種々間違つた手段やよくない方法をとるのである。例へば友達に自分を偉く見せたいといふのは誰でも自然にもつ慾求であるが、そのために家の物を默つて持出したり他人のものをとつて來たりするのはよくない手段

である。故に子供がそんなことをした場合、只「物を盗んだ」といふ點のみを責めると、子供はそれが惡いことだと分つても尙「そんならどうしたらよいのか」と迷ひ遂には反抗も起すやうになる。從つて「物を盗む」ことはいけないと嚴しく叱る方面に子供が自分を偉く見せたいと思ふ慾求を正しい仕方例へば他の子供と同じ樣な物を持たすとか勳章をつけてやるとか更に進んでは本當に偉いのはこんなことだと偉人の幼少時の傳記を話してやるとか等の手段で滿足させてやらねばならぬ。かやうな深い同情と注意とが必要なので、親はよく子供の本當の欲求を理解し、子供の能力以上のことを强ひたり、子供としては當然の欲求であることを無理に抑へつけ、或は之に反することを强ひたりせぬやうに心懸けねばならぬ。それと同時に、前章でも述べた通り親自ら正しい生活を爲し暖い感情を抱いて、子供の手本となり子供を正しく感化するやうにしなければならぬ。

一　幼兒の社會性　生後第四年目の初頃は、强情の最も著しい頃であるが、その後漸次子供に物分りが出來てくるにつれ、次第におとなしくなつてくる。即ち多少きゝわけもよくなるし、又友達同志比較的仲よく遊ぶやうになつてくる。勿論幼い子供のことであるから、きゝわけといつても程度があり、仲よく遊んでゐるかと思へばすぐ喧嘩をするといつた風ではあるけれども、數

ケ月以前に比べると餘程社會性に富んで來るのである。我儘一杯であつた子供がお互ひの我儘を抑へあつて初めて共同の秩序に從ふことを覺え出したものとみられるのである。この傾向は今後年を經るに從つて段々强くなつて行き遂には社會一般の秩序や道德に從つて人類の共存共榮のために盡す社會性の素地となるものであつて極めて大切なものであることは前述の通りである。

子供がこのやうな社會性を發達せしめるのは、一方には知力が進んで來て、理性で慾望や感情を抑へ、大人のいひつけを守り、或は喧嘩を避け或は互ひに扶け合ふことが出來るやうになるのにもよるが、又他方では同じ年輩の子供同志で遊んでゐる裡に自然に喧嘩や制裁が起り、集團の秩序を破壞するやうな子供は除け者にされるので、之がために子供が秩序に馴れてくるのにもよる。どちらかといへば子供の社會性はこの後の場合即ち子供同志の集團的遊戯の中から鍛へられてくるのでなければ、本當に强い底力をもつてゐるものとはいはれぬことが多い。この意味で幼兒が友達と遊ぶといふことは子供の發達上極めて大切なものであるから、親はなるべく同じ年輩の友達を作つてやるやうにしなければならぬ。

子供同志遊んで居ればよく喧嘩が起る。併し右に述べたやうなわけで、喧嘩は子供の社會性の發達に重要な意味をもつものであるから、或程度までは子供同志のする通りにさせて置かねばな

らない。子供が一寸玩具の取合ひをした、一寸毆りあひをした、といふやうな場合に一々大人が割つてはいり直ぐ樣双方をなだめつけるやうなことが習慣となるのは面白くない。子供は大人のゐる時にのみ威張つて亂暴をし子供同志になると意氣地なしになつてしまふ、所謂內辨慶になつて、社會性の發達が不十分になつてしまふ。故に子供の間に喧嘩が起つた場合、双方に危害がない範圍內では、大人は直接手を下さず、「喧嘩をしてはいけない、仲よく遊びなさい」程度の警告を與へる位でよいであらう。子供がこの年齡にも達するともはやいつでも親達の目の屆く所でのみ遊んでゐるのではなく、從つて喧嘩も親達の知らぬ間に始終起つてゐるのであるから、實際に於て喧嘩の解決は子供同志に任せてゐる場合が非常に多いのである。

併し何分幼い子供同志のことであるから、往々激しい感情に驅られて亂暴な行爲に出ることがあるのを忘れてはならぬ。子供の發達にとつては喧嘩は有用なものであるか、それを奬勵する必要は少しもない。なるべく喧嘩をせずに仲よく遊ぶやうにいひきかせて置かねばならぬ。又なるべく監視の屆くやうに注意してゐて、子供の喧嘩が亂暴に流れぬやうに氣をつけねばならぬ。このことは普通の家庭では比較的困難であるから、なるべく幼稚園へやつて、子供同志の仲のよい協同生活を經驗さすことが望ましいのである。勿論幼稚園でも喧嘩は起る。併しこゝでは監督の

目が行屆いて居る上に、子供の喧嘩を巧みに指導することが出來るのである。

子供の喧嘩の原因は大體子供の年齢に應じて特徴がある。前述の如く强情期及びそれ以前の子供の喧嘩は殆んどすべて、玩具や食物や場所等の取合ひに基いてゐる。この種の原因に基く喧嘩は最も幼稚なものであるが又最も根本的なものである。幼い子供は單純であるから自分の慾望を隱したり抑へたりすることが出來ず、只管慾望を滿足せしめやうとするから、小さい子供が相寄れば必ず慾望の衝突が起つて喧嘩となるのは當然である。所が强情期を過ぎて子供が幾分集團的に遊ぶやうになつてくると、この集團的遊戯の約束に從はなかつたり或は其他の方法で集團遊戯の秩序を亂すやうな行ひが喧嘩の原因となる場合が現れてくる。俗にいふ「意地惡る」である。

「意地惡る」といふことは、非常に複雜な原因に基く心理であるが、結局は慾望の衝突に歸するので、幼兒は、自分の慾望の滿足が邪魔されると、之を相手の意地惡るに歸してしまふのである。從つて子供は、喧嘩が起るといつても相手が意地惡るであるやうにいふ。數人が仲よく遊んでゐる所へ他の一人がやつて來て仲間に加はらうとして斷られた場合、後から來たその子供は他の者を意地惡るだと評する。併し一方斷つた方からいへば、今まで數人で都合よく遊んでゐたのに餘計の一人が加はると今までの遊びが續けられなくなる故、それで斷つたのであるから、この方から

らいふと後から來た一人が意地惡るになるのである。又仲よく遊んでゐた數人の中の一人が何か要求を出したゝめそこに喧嘩が起つた場合要求を出したその子供は他の者の意地惡るのため自分の要求が滿されなかつたと思ひ、他の者はその子供が意地惡るをして遊びを壞してしまつたのだといふ。このやうに一方の子供が喧嘩の原因を相手の意地惡るに歸する場合は、片方も同樣に相手の意地惡るを告げるのであるから、かういふ喧嘩を取扱ふ大人はよく注意して双方の言分を確めないと、子供に乘ぜられてしまふことが尠くない。大體に於て多人數の方が正當で、みんなの遊びを邪魔した一人の方の我儘を抑へしめるのがよいけれども必ずしも常にさうとのみは定められない即ち多人數が組を組んで弱い者や年下の者に意地惡るをする場合も尠くないからである。

又こんなことから、子供は遊んで貰ひ度いばかりに家の物を持出して之を他の者に與へたり、大きな子供に示唆されるまゝに盜みをしたりして、次第に惡い行爲に染みる危險があることも言つて置かねばならない。

子供の發達には子供同志の集團的な遊びやその中に起る喧嘩が大切な意味をもつものであり、此等に對してば餘り口喧しく大人が干涉しない方がよいといつても、全然之を監督外に放任して置いて顧みぬといふのは、頗る危險が多いものであることを忘れてはならぬ。

二　幼兒の遊び

幼い子供の生活は結局食ふ眠る遊ぶの三つに盡きるといつてもよいのであつて、自由に活潑に遊ぶことの出來なかつた子供は性質がいぢけ、潑溂とした天眞爛漫な子供らしさを失ひ易い。遊びといふけれども、この時期の幼兒は遊びは大人の娛樂や暇つぶしの爲めの遊びとは全然性質の違ふもので、子供は遊戯の中から知識を廣め知力や意志の力を練り、其他生活上必要な種々の事柄を覺えて行くのである。

幼兒期の子供の遊戯中最も著しいのは團體遊戯である。强情期を過ぎると子供は又好んで友達同志と一緒に遊ぶことは前述の通りであるが、もうこの位の年齡になると以前の如く數人が只集つて騷いでゐる如きとりとめのないものではなくなつて、鬼ゴツコ、まゝごと、中の〳〵小坊さん、等の如き一定の約束をもつた遊びを盛にするやうになる。各自一つの目的の下に纏つた遊びをするのみならず、各自のする動作も豫め定められてゐるもので多い。子供はかういふ團體遊戯の間に自然に秩序や規律に從ふことを訓練されて行くのである。

何處の國にも又どんな地方にも、昔から傳つてゐるかやうな子供の團體遊戯があるものであるが、又子供達は大人の生活や自分の周圍に起つた事柄を眞似して、種々な遊び方を工夫する。巷の風俗や映畫芝居等の影響が子供の遊戯の上に現れ、從つて此等のものが子供の心に重大な影響を及ぼすに至るのである。

斯樣な團體遊戯の他にこの時期の子供に喜ばれる遊びは繪を描いたり物を作つたりすることである。即ち道具や材料を用ひて何かの形を作るので、之を造形遊戯と名づける。

併し四五歲頃の子供に紙と鉛筆や木片と小刀等を與へて繪を描かせたり物を作らせたりしやうとしても、子供は初め中々容易に仕事にとりかゝらないものである。いつまでも鉛筆をいぢり廻したり紙を並べ直したり、或は小刀を調べたり木片を重ね合せたりしてゐて、肝心の仕事には中々とりかゝらない。併しこの一見愚圖々々してゐて齒痒ゆく思はれる間が子供にとつては大切なのであり、この間に子供は十分道具や材料に馴れ之を悉知するのであることを心得てゐて頂き度い。

子供が愈々仕事にとりかゝつて、繪や細工を作り初めると、實物とは非常に違つた奇妙な形を作出す場合が頗る多い。餘り實物と異つてゐるので大人から見ると奇異に思はれるものも少くない。それで大人はつひ子供の作品を笑つたり訂正したり、或は描き方を敎へやうとし度くなるものであるが、かゝることはなるべく爲ない方がよい。何故なれば、子供が繪を描き物を拵へるのは一つの樂しみである故に、出來上つたものに就いて餘りとやかく言はれたり或は窮屈な描き方

や作り方を強ひられたりすると、創作の興味は非常に損ねられて、最早や繪も描かなくなり手工も喜ばしくなり易いからである。その上、或る物をそれが見える通りに描かうといふのは子供の圖畫の態度ではなく、子供は圖畫に於て寧ろ知つてゐる所を表現しやうとするのである。

箱の中に豆が入つてゐることを知つて居れば外からは見えなくても子供は豆を繪に表はさなければ承知しない。又Aの如き菱形を見せて之を幼い子供に描かせるとBの如きものを描く子供が時々ある。菱形の上下の尖つてゐることをBでは縦の短い棒で表はしてゐるのであつて、子供の繪にはこのやうに手本をそのまゝ眞似て描くのでなく手本からうけた印象を自己流の仕方で表現しやうとする場合が非常に多いのである。或は又雨だと言つてよく鉛筆を茶苦茶に紙面に走らせてゐることがあるが、之は雨の盛に降るその感じを手の運動で表現してゐるのである。これ等二三の例でも分るやうに、子供には子供としての感じがあり、子供としての表現の仕方があるのであるから、大人が之を理解せずに大人の描き方や大人の圖畫を餘り早くから子供に强制することは間違つてゐるといはねばならぬ。手工でも同様である。材料や道具を子供に與へたら、あとはなるべく子供の勝手にさせて置く方がよい。勿論子供はいつまでも斯る子供流の仕方にのみ滿足してゐるのではなく、成長するに從つて自分の作つたものが非常に實物と違つてゐるのに氣づき、段々實物に似せて作らうとするやうになり、手本をほしがり、又描き方作り方を敎へてほしがるやうになつてくるが、それは大抵小學校にはいつてからである。幼兒の時期はなるべく子供をして自由自在に創作せしめ、その着眼、觀察、表現のよい所を見出してやるやうにするのがよい。

A

B

斯樣な幼兒の造形遊戯は、遊戯を仕事に結びつける點で重要な意味をもつてゐる。いふまでもなく子供は不完全なものであつて段々成長し發達し訓練されて立派な一人前の人間にならなければならぬものである。いつまでも子供の時の狀態を續け、興味本位自己本位にのみ暮してゐては立派なものにはなり得ない。幼兒の間は未だ身心が十分に固つてゐないから、無理な强制や窮屈な束縛を避けてなるべく子供の自然の生長を損ねないやうにし、自然に迸(ほとばし)り出る生活力を十分に活動せしめて身心發達の基礎となる力を十分に養ふことが大切であるけれども、他方では次第に知力を磨き意志を鍛へて、多少困難な問題に直面しても之に堪へ、辛抱して之をなしとげる底力を養ふやうにしなければ、精神力の向上は望み得ないのである。子供は一人前となる迄の間に、

非常に澤山のことを學び非常に難かしい仕事を覺えこまねばならないのである。それ等のことは常に必ずしも愉快なことのみではなく、又目前の利害からは緣の遠い事柄である場合も多い。併しそれでも子供は斯ういふ苦しい修業を積まなければ、一人前とはなり得ないのである。幼兒期を過ぎて子供が學校にはいるやうになると、その頃から段々とこの苦しい勉强が多くなつて、子供は興味本位ではなく强制的に種々の仕事をしなければならなくなる。このやうな仕事即ち學業を子供が樂しんで勵むやうになるのは、一つには教へ方の上手下手にもより、又子供の天分によるものであるが、今一つには幼兒期を如何に過したかにもよるものである。そしてそれには幼兒期に於て子供に喜ばれる造形遊戯によつて、仕事を樂しむ習慣をつけて置くことが、非常に役に立つのである。この點を尙明かにするために、次に幼兒の知能の働きについて稍詳しく述べて見やう。

三　幼兒の知的活動　上に述べたやうに、赤坊が一個の人間になるのには、三つの重要な力が働いてゐる。一は遺傳的な素質であり、次は環境の力であり、第三は普通所謂教育である。「玉磨かざれば光なし」で、どんな立派な素質があつても、教育によつて之を磨かなければ十分に發展しない。同樣に、いくら教育をして見ても白痴を天才にするのは困難である。又立派な素質もあり、高等の教育をうけた人でも、環境によつて良くない方向に墮落してしまふ例はよくあることである。

このやうに、一個の人間が出來上るのは、今述べた三つの力によつてゐるのであるが、子供が幼ければ幼い程、是等三つの要素は渾然と一つに融合してゐて切離すことが出來ないものである。普通にいふ教育、即ち子供の理解力に訴へて子供に物を教へることは、子供の理解力が極めて不十分なのであるから頗る困難なことである。故に幼い間の教育といふのは物を教へることよりは、子供が成長するにつれ次第に現はしてくる天分を損はぬやうにし、日常生活中に於て之を適當に切瑳琢磨する機會をなるべく多く與へることが大切である。即ち所謂生活訓練が大切なのである。

幼い子供の知的活動は、天分である能力の發達が基礎ではあるが、尙之に基いて周圍の事柄を摸倣し、それを又自分でやつてみることによつて段々と發達するものである。斯る働きを綜合して知能と稱するのであるが、之は初めは本能的に行はれるものであるが、それが次第に洗練されて、物を考へたり判斷したり推理したりする高級な働きとなつて行くのである。それ故に幼い子供の知的活動の訓練では、未だ不十分な斯る働きそのものを養ひ育て發達させることが大切なの

であつて、その乏しい不十分な働きを無理に使はせて無暗みに多くのことを覺えさせたり眞似させたりするにあるのではない。

斯る知能の働きは根本では人間の本能に基いてゐるものであるから、子供が幼ければ幼い程、純粹の知的活動といふものはなく、いつでもそれは慾望や感情や努力等と密接に結びついてゐるものであつて、かういふものから切離して智慧の力のみを發達させるといふことは出來ない。從つて幼い子供の知的訓練は日常生活の訓練と切離しては出來ないのである。身體を健全にし、慾望を旺盛ならしめ、之によつて生活力を盛ならしめるのでなければ、十分な知的發達は望めない。生活力が旺盛であれば、之が自然遊戯や、外界への興味となつて現はれ、又目的に對する強い努力となり、之等によつて知の天分は發達を遂げて行くのである。從つて數や文字の如き抽象的な觀念を驅使し得ない滿三歳位の子供に數や文字を教込んで、假りに子供がそれを眞似出來たにしても、それによつて本當の智能が伸びたのか否かは甚だ疑はしい、却て左樣な無理のために、子供の心がいぢけて爾後の發達のために惡い影響を殘すことが多いのである。幼兒の智能を伸ばすのは斯る方法によるのではなく、適當な材料や刺戟を與へ、兒童の自發的興味を唆つて、兒童自身によつて自分の智能を働かしめる機會を多くしてやる事である。之は多くの場合遊戯となつて現はれる。思ふ存分遊ばせることが最も大切なことである。それと共に、規律的訓練によつて、爲さんとする意力を養ふことが大切なのである。

斯る意味に於てこの年齡頃の幼兒に對しては、彼等を十分に遊ばせ且その智能行使を全く彼等の自由にさせるのがよいのであるが、前述の如くいつまでも自由放任のみではいけない。滿四五歳になつて兒童に訓練や指導が本當に効果をもち得る時期に至つたら今まで自發的興味によつてしてゐた事を、しなければならぬといふ義務の精神をもつて行ふやうに導かねばならない。即ち前項で述べた如く遊戯に仕事を加へるやうに導かねばならぬ。之が本當の意味での「玉を磨く」ことになるのである。そのために子供同志の雜然としてゐた集團を指導者のある集團に替へ、規律的な統制のある環境で訓練することが大切である。それには兒童を信頼の出來る幼稚園へやるのがよい。併し幼稚園のみではいけないので、そこで訓練される規律を家庭生活の上にも及ぼすやうにしなければならない。

このやうに幼稚園兒頃の智能の本態は、未だ智能が生活と密接に結びつき、意志や感情に支配されることが多いのであるから、かやうな生活的訓練を積極的に指導し、單なる愉快の興味にのみ基く遊戯から、作業—即ち目的の爲めには不愉快をも堪へてやり通す意志を以てなされる仕事

―へと兒童を導いて行くやうにすることが大切である。「幼兒に字を敎へてもよいだらうか」といふ質問を未だによく受けるが、子供が興味を示すのなら敎へてやるべきであり、子供が未だ興味を示さぬのに無理に敎込むのはいけないことは當然である。文字や數は後の生活に於て重要な役割をなすものであるから、適當な時期に之に對して兒童が興味を向けるやうに導くこと―例へば繪本を與へるとか、積木をもたすとか、簡單な金錢の勘定をさせるとかしてみることは大切である。只親としては斯ういふ材料や機會を適當に與へるだけでよいのであつて、それに對し子供が親の望むやうな興味を示さなくても、之を强ひることは未だ無理なのである。それよりは日常生活を出來るだけ規則的にし、兒童をして自分のことはなるべく自分でさせ、子供で出來るやうな簡單な仕事―例へば玩具を片づけるとか、食卓に布をかけるとか、お客や家族の履物を揃へるとかいふ如き、簡單な事柄を兒童の役目にさせて、之に責任をもたせてやらせるといふ遣方で兒童を訓練することが、ひいては兒童の智能を伸ばすことになるのである。特別の天才でない限りは幼兒では多く知るといふよりは何が出來るかといふことの方に、本當の智能の働きが存在するのであり、何が出來るかといふことは、兒童が自ら實際にやるのでなければその力がつくものではない。實際にやつてゐて困難にぶつかり、この困難に打克つて行く度毎に智能の力は充實して行くのである。

四　幼兒の質問　幼兒の智慧づきの一現象として、この頃の子供はよく種々なことを尋ねる。說明のしやうのないやうなことまで不思議がつて「何故？」を連發し、大人を困らせる。之は一つには好奇心にもよるけれども、又一つには幼兒が種々な事柄を自己流の考方で納得しやうとするのにもよる。

幼兒の自己流の考へ方といふのは、何でも物事を自己本位に考へ、自分にとつて何のためにあるのかといふことは先づ考へること、及び、子供は森羅萬象悉く自分等と同じやうに心を持ち同じやうに感情や意志や思慮をもつものだと考へるので、或事柄や事物がどんなつもりで新々の事柄になつたのかといふことを知らうとすることゝである。子供が「何故雷が鳴るのか」と聞く場合には、別に雷鳴の難かしい物理學を尋ねてゐるのではなく、未開人が考へてゐたのと同じやうに、「何の爲めに雷が鳴り、どんなつもりで雷は鳴るのか」といふやうなことを考へてゐるのである。故に、幼兒の斯樣な質問に對して陰電氣と陽電氣の關係や地磁氣の物理學や等を說明してみても少しも子供は滿足しないのである。斯樣なことをいくら說明してやつても子供は少しも分らないのであるから、いつまでも「何故」は解消しない。併し雷はお臍をとりに來るとか、惡い

子供を探しに來る等と、如何にも非科學的なことであるが、子供の擬人的な考方に適ふ仕方で答へてやればそれで滿足してゐる。子供の質問の本體が斯るものであるから、子供の質問に對する答へもこのやうな種類のもので差支へないのである。それにも拘らず、子供の知力や好奇心を買被り過ぎて、種々難かしいことを說明しやうとするから、結局子供を納得させることが出來なくなるのである。勿論子供が大きくなり學校へ行くやうになつて段々知力が發達して來たら、子供の質問の內容は段々事實に即した事柄やその關係を尋ねるやうになるのであるから、さういふ質問に對して子供だましの如き答をするのは頗る非敎育的であるが、幼兒期の子供の質問を之と同價値に考へるのは間違つてゐる。

勿論幼兒と雖も常に必ずしも右に述べたやうな自己中心的な、或は擬人的な質問のみを發するのでなく、事物の簡單な關係について尋ねる場合もあり、比較的科學的な答を要求することもある。是等はその時に臨んで親が適當に極く分り易く說明してやるべきである。併し子供に對してむつかしい理屈を說明する必要はなく、只表面上の連絡のみを敎へてやればそれで十分なのである。例へば「電燈はどうしてつくの」といふ質問には、スキッチをひねるから位の程度でよく、「何故スキッチをひねると燈がつくの」と尋ねれば電線を傳つて電氣が來てゐる、程度の答で十

分である。「電氣て何」ときけば「目に見えないもの」といつたやうに、極めて表面的な說明で十分なのである。

子供の質問の中で親がよく間誤つくのは「赤兒の出生」に關するもので、本當のことをいつてやるべきか否かでよく議論されてゐる。併し幼兒のこの質問も他の質問と同樣に極めて輕く取扱つてゐて差支へないもので、親が顏を赤らめ乍ら妙に四角ばつて質問を封じたり、生物學の比喩を用ひたりする必要は少しもない。「赤兒はどうして出來たの」ときけば、お母さんが生んだのだと言つてやればよく、「何處から出て來たの」といへばお腹からと答へる程度でよい。子供は別にそれ以上不思議がらぬものであり、出生に關して多少でも事實を穿鑿しやうとし出すのは十歲前後になつてからである。幼兒に對して下手な性敎育をして却つて性的な好奇心を刺戟すると、その方が遙かに有害なものである。

五　幼兒の想像　幼兒は一般に想像の强いものであるといはれてゐる。併しこの考方には注意しなければならぬ點がある。子供は想像が旺盛であるといはれるが、それは決して大人に比して想像が豐かであるとか能力が大であるとかいふ意味ではない。子供は經驗が乏しいから物事を客觀的に理解する力が薄弱なため、前述の如き自己本位な考方や擬人的な考方で物事を理解し、又自

己の考へで考へたことがそのまゝ實在し得る事柄のやうに思ひ易いといふことを指すのである。一體想像といつても全然今まで經驗のない事柄を想像し得るのではなく、從來の經驗を基礎とし、之に基いて種々の想像が行はれるのであるから、想像の豐富さや深味に於ては子供は大人のそれに比すべくもない。甚だ貧弱なものである。只大人は經驗を積んでゐるから、物事をよく客觀的に理解し、自分の考へや想像を事實に就て檢證しやうといふ反省力をもつてゐるに對し、幼兒は經驗が乏しいから斯樣な反省がなく、想像したことが直ちに實際にあり得ることのやうに思ひ易い。從つて子供の方が大人に比して想像世界と實在世界との境界が餘程曖昧であり、子供の生活は想像によつて大人よりも遙かに左右され易いのである。想像が實在と變らぬ程生々とした興奮を子供に與へるのである。又一般に子供は大人よりも遙かに記憶像がはつきりしてゐて目のあたりに見る如くである。そこで子供はガサ〳〵した現實的なことに縛られること少く、想像的な事柄が子供の生活に生々しい印象を與へ、それによつてかなり豐富な潤ひが生活上に漂ふのである。

子供の斯樣な心理狀態に對して適當してゐるものは童話である。童話に於ては想像をどこまでも伸すことが出來るし、又そこで活躍する想像は子供にみづ〳〵しい體驗と興奮を與へるので、

お話を聞くことは子供の最も好きなものゝ一つである。併し今述べた通り、子供の想像の特徴はそれが實在と同樣に生々しい印象を子供に與へる點にあるのであるが、想像の內容は子供の經驗に相應した頗る幼稚な事柄であるのであるから、子供は想像が旺盛であるからと言つて大人は想像の如き幻想的な想像に富む物語を與へるのは間違つてゐる。子供の生活に卑近な事柄、子供の考方に基いて理解出來る所謂お伽噺の類を何度も〳〵聞かせ、子供がそれによつて印象を深め經驗を豐富にするやうにするのがよいのである。

併し斯樣に想像と實在とが比較的曖昧な狀態にあるといふのは、子供の精神が未だ發達しない原始的な狀態にあるからである。此から子供は種々な經驗を積んで自分の考への世界と實在の世界とをはつきり認識し、自分の考へを實在によつて規定し、即ち廣く深く物事に通じるやうにならねばならぬのである。從つて子供の想像生活が大人から見ると如何にも藝術的に見え、又新鮮に見えても、之を無暗みに尊重し、現實による訓練を遠けていつまでも子供の想像に媚びてのみゐるやうなことは絕對に排斥しなければならぬ。

六　幼兒の感情生活　さきに述べたやうに、子供は未だ理性が乏しく、その智能の働きも意志や感情に支配されることが多いのであるから、幼兒の生活を導く上にはその感情方面に特に留意

しなければならない。

感情は理性よりも遙かに根本的なものであり從つて强力なものであるから、人間の生活の上に極めて重要な意味のあるものである。併しながら、人間は理性の力によつて感情を統御し、本能的な盲目的な行爲を理性によつて導くやうにならなければ、一人前の人間として行動することは出來ないのである。殊に社會生活が發達し環境條件が複雜になればなる程、感情の統御といふことは大切であつて、もし之が出來ず感情の興奮に任せて無統制な行動しか出來ない者は、今日の人間社會に於ては生活し得ないものである。躾けといふのは結局感情を統御し、社會に適應して生活を營み得るやうにする感情の訓練であるといつても差支へない程である。

感情は根本に於ては快と不快とに分けられる。人間は快を求め不快を避けるやうに行動するものであるが、感情の統御に於ては、この快樂主義的な傾向を堪えるやうに鍛錬することが根本となつてゐる。即ち不快なものも或程度に於ては之に堪忍び、快なるものに對しても欲求を抑へるといふことが大切なのであつて、この手綱が確かりしてゐないと生活が段々華美贅澤になり性質が惰弱となり易い。子供の生活に於ても、周圍があまり便利であり、贅澤に流れ、又自由に過ぎると、感情の抑制が十分に行はれず、意志の弱い我儘な性格の所有者となり易い。文化が發達

し、生活が便利になつてゐる今日の都會生活では、子供の教育上特にこの點に十分意を用ひることが大切である。

我々の生活の基礎となつてゐる本能には、恐、怒、嫌惡、愛、同情、等激しい複雜な感情が伴ふもので、我々は斯樣な感情に動かされて或は危險を避け或は敵を殪し、或は子を慈み或は交友を結ぶ等のことが出來るのであるのみならず、病氣を恐れるから醫學が進歩し、惡い藝術を厭ふからよい藝術が進歩し、反社會的な罪を憎むから道德も發達するといふやうに、凡ゆる文化の發達の基礎も斯樣な感情にあるといふことが出來る。子供の成長に於ても學問や道德が修業されて行くのはその根底に强い感情が存するからである。併しながら、このやうに人間にとつて有益な感情でも、その中の何か一つが特に强くなつて常に他を壓するやうになると却つて害となる。臆病とか短氣とか神經質とか其他種々の名前で呼ばれる性格は、多少とも斯樣な傾向のあるものである。例へば恐れは危險から身を避けるための有用な感情であるが、餘り種々なことに恐れが强すぎると臆病や神經質になつて、遂には何も出來なくなつてしまふ。怒りは進んで害惡を除くための有用な感情であるが、いつでも之が强くなり過ぎると、思慮分別を缺いて自ら自分の身を滅すに至る。嫌惡は豫め危險を豫感する感情で從つて非常に大切なものであるが、之が餘り强すぎ

ると之も亦常に滿足を覺えず神經症に陷ることもある。周圍から餘り能力以上のことを要求されすぎて育てられた子供は、よく斯ういふ結果に陷る。このやうに、感情がよく本來の目的を全うし、生活が順調に進み得るのは、夫々の感情がよく統制され或る一つが過度に強くなると他の反對のものが強くなつて之を牽制し、そこに思慮を働かす餘裕が生じる程に統制されねばならぬのである。從つて個々の感情そのものは十分に之を強くせしめると共に、生活訓練によつて段々と感情を發する場合を洗練して高尚な感情とし、相互の感情の間の調和が出來るやうにすることが、感情の訓練の最も大切な點である。道德もそれによつて發達するのである。

偖幼兒の間は、未だ圓滿な感情の統制を望むには早すぎる。寧ろ一つ一つの感情に於て、よくそれを發すべき場合と、堪へる場合とを覺えて行くことが大切である。幼兒の強い感情の興奮をすべて抑制しやうとするのは、子供の生活力を萎微せしめるやうなものであつて、之は甚だよくない。寧ろ幼兒の間は感情を鍛へる意味に於て、大いに感情の滿足を滿させてやるのがよい。その意味で子供の所謂やんちやは抑壓するに及ばない。但、子供の行動が他人の迷惑になる場合があることをよく覺えさせるやうにし、他人に迷惑を及ぼすやうなことは、出來るだけ抑制するやうに訓練しなければならない。之によつて子供は自ら感情の統制を習得して行くのである。

幼兒期の感情は育兒上極めて大切であり、之に基く問題が多いがそれについては第二編を參照されたい。但、こゝに一つ注意して置きたいのは、幼兒の感情を取扱ふ場合その自尊心或は誇りといはれる所の氣持について大人が深い同情をもつてゐなければならぬことである。强情期の頃から著しく强くなつて來る自尊心は、子供の今後の發達に於て非常に重要なものとなり、子供の怒り、奮發、失意等、その建設的な感情や意力は之を基礎として働くやうになる。子供を勵まさうと思つて叱咤しても、それが子供の自尊心を害するやうなことになると、却つて反抗を喚起すのみである。子供を戒めやうと思つて之を羞かしめると、子供は激しい怒りを覺えて强い復讐の念を生ずるやうになる。自尊心を適當に利用し、少し宛能力以上のことに努力せしめるならば、それは子供の向上に非常に役立つけれども、若し激しく自尊心を害するやうなことがあると思はぬ問題を生じ易いから、この點特に注意して置き度い。

自尊心と關聯してゐるが、子供に何かをさせやうとする時は、子供の心理をよく考へ、子供に先んじて先走りをしないやうにすることも大切である。お客に對して子供がお辭儀をしやうとしてゐる時に親から「しなさい」といはれると、急に出來なくなつてしまふ。子供があやまらうと思つてゐる時に、大人が命令的に「あやまれ」といふと、つい言ひそびれてしまふやうになる。

斯様な事柄は子供が横着な故ではなく、子供の心の働き方として先づ一般的なものであつて、蛇を見たらゾツとするのと餘り變らない自然の事柄である。故に子供を朗かにさせるのには、子供の心の動きを明察して、子供が何かしやうとしてゐる前に大人から強制しないやうに、又子供が素直に行動し得るやうに大人も感情を同じくして誘導するやうにしてやるのがよい。

七　幼兒の不良行爲　幼い子供は眞に純眞なもので、特別の事情のない限り不良行爲のあるものではない。只子供は思慮が乏しく經驗が淺いため、社會的に見て又教育的に見て、訓戒し或は禁止し、場合によつては罰を與へねばならぬやうな行爲をするのである。從つて子供が假令よくない事をしたにしても、之を大人の犯罪や破廉恥行爲にあるやうに計畫的な腹があつてしたものと思ひ、之を疑つたり或は憎むのは童心を傷ける最も有害な事柄であるのみならず、場合によつては却つてそのために子供を惡い方へ導いてしまふことが少くない。子供のどんな行爲に對しても、その心情に對しては同情し、只遣方が間違つてゐることを諭すといふ態度で以て臨むことが最も肝要である。

子供の不良行爲の中最も多いのは嘘である。併し幼兒の嘘は大部分一時の恐怖心に基く隱蔽であつて、慾にからまれて計畫的な嘘をいふといふ惡質のものは極めて少いのである。從つて幼

い子供の微笑ましい恐怖心に同情し、本當のことをいふ勇氣を讃へるやうに躾けることが大切である。尙幼兒の嘘については第二編に於て詳しく述べてある。

次に問題となるのは盜癖である。幼兒の盜みは他愛のないもので、菓子屋の店から菓子をもつて來たり、友達の玩具を隱して置いたり、家のものを無斷で持出したりする程度であるが、併し之を放置して置くと段々取返しのつかない事になつて行くから、なるべく初期に之を發見し、監督を十分にするやうにしなければならぬ。智能の劣つた子供に多く、斯様な場合は善惡の觀念なしに慾望に驅られてするのが多いのであるから、之は場合によつては相當の苦痛を與へても行爲そのものを抑制するやうに訓練しなければならぬ。又貧困のため他の者のもつてゐるものを自分が持たず欲しさの餘り友達のものを隱し盜むことがある。之は大いに同情したいが、やはり行爲そのものゝ非は諭さねばならぬ。

子供が行ふ性的行爲、例へば醫者ゴツコと稱して數人の子供同志で身體を弄し合つたり、或は男女の幼兒が互に性器を示し合つたり、更には性交の眞似をしたりする如き行爲は、隱れた場所ではかなり屢々行はれてゐるものである。斯様な行爲には性慾が伴つてゐるわけではなく、只好奇心に基く遊戯であるが、併し度重なるとやはり早熟の因となり、又は健全な感情發達を歪める

もとゝなるから、親は子供のさういふ行爲を發見したならばなるべく、早くその對應を講じなければならぬ。勿論禁ずるのであるが、何故いけないのかそんな理由をいふ必要はない。「いけないことだからしていけない」と觀念させればよいのである。そのために却つて子供の好奇心を挑發しはしまいかといふのは杞憂である。

特別の早熟兒は別として普通の幼兒が斯樣な性的行爲をするに至るには三つの經路がある。一は身體の不潔から感覺的に刺戟される場合で、之は幼い時からの親の注意が足りなかつたからである。二は下女下男等に教へられたり、或は大人の話から暗示されたりして起る場合である。三は年上の子供から持ちかけられて、一種の遊戯と心得て行ふ場合で、之が最も多い。故にかういふ機會を出來るだけ遠ざけて機會を少くすることが必要である。

其他幼兒の不良行爲には放浪、放火、其他種々のものがあるけれども、極めて稀なものであり、特別の子供の場合が多いのであるから、斯樣なものについては兒童相談所等についてよく相談して處置を講ずるのがよい。

附表　兒童の精神發達に卽した育兒上の注意一覽表

時期	年齡	特に留意すべき點	運動遊戯玩具	規律	意地・强情	兒童に對する指導
乳兒期	一年の前三分一	安靜睡眠を妨げぬこと		兒童が自然に示す規則性を出來るだけ妨げぬこと		
	一年の中三分一	適度の外界刺戟を與へること	色、形、音等の變化あるものを與へる	夜間續けて眠むることに慣れさせる		
	一年の後三分一	清潔や規律に馴致せしめること	徐々に動く玩具を與へる	乳離れ清潔に慣れさせよ		言葉を覺えさすには未だ早すぎる
幼兒期	二歲の前半	運動の自由を妨げぬこと	歩行が初まる	いひつけを守るには早すぎる慣れさすより他ない		家庭生活に加へて言葉を覺える機會を多くする
	二歲の後半	同年齡の兒童と交らせること	ゴッコ遊びが初まる大人も加つてやる	大人が兒童の相手にのみなつて居られない時のあることを知らせる		この頃に於てまだ言葉の出ない兒童は注意の要あり
	三歲	兒童の强情を心配せぬこと	ゴッコ遊びの最高潮	自尊心を利用して整頓せしめる	兒童に意地が出てくる(强情期)	兒童同志の秩序に從はしめること
	四歲	兒童の作業に干涉せぬこと	積木砂遊びゴッコ遊び等を戸外で元氣に			
	五歲	當然なる命令や禁止に服從させること	戸外で元氣に集團遊戯、造形遊戯(自分でさせる)		兒童の意地や自尊心を理解して導くこと	積極的指導が可能兒童に自分で出來ることゝ出來ぬことゝのあることを辨へさす
	六歲	喜んで用事をさせること	作業が出來るやうにならねばならぬ	積極的に訓練することが可能になるよい習慣をつけるやうに日常生活を規則的にすること		

第二編　子供によく起る問題

第一章　躾方について

育兒に關しては父母共に重要な役割を持ち之を果すべき筈なのであるが、從來、子供の問題と云へば殆ど母親のみに限られて居る狀態である。と云ふのは事實母親は家庭に在つてその時間なり、精力の大部分を子供の世話、監督に費すから、自然育兒上の問題は殆ど全部母親に關係するからである。

が然し育兒上生ずる無數の問題を巧く片づけるには母親にまかせきりでは成功しない。母親の愛は最も大切なものであるが盲目的になり勝ちで育兒上、邪魔になることが往々ある。

母親の愛は子供を思ふ餘り、心配し行き、不安となり、時とすると恐怖にさへなり、遂には子供の多くの問題を避ける樣にすらなる。

過度の心配は子供を全く變なものにして終ふ。子供は自己中心になり、病氣だと思はれたい爲、或は病氣が甚いと思はれたい爲に、色々の嘘の苦痛を訴へるようになることがある。

災難に遇つたとか或は病氣した子供の態度が著しく變化するのを皆さんはよく知つて居る。病院から歸つた子供とか、病氣の恢復期にある子供とかを、一寸考へて御覽なさい。

すべてが子供中心であり、家中の者が子供の奴隷である。こんな狀態に子供をおけば、子供は利己的な我儘者にならないですむだらうか。

子供の性格が一變して、兩親の心配の種となる、そして兩親は病氣の爲にこんなになつたんだと思ふ。が事實は家庭の人々が子供に對する態度を一變した爲に、そうなつたので、決して病氣の故ではない。

これと同じことが兩親が始終子供のことを心配しすぎる爲に起る。時々子供は不愉快な義務を免れる爲、或は特別自分に注意させようとする爲に假病を使ふことがある。

子供が怪我をするだらう、好ましくない子供と遊んで、言葉つきがきたなくなつたり、不良なことを敎へられはすまいかと非常に心配し過ぎる親達を往々見受ける。たとへそんなことがあるとしても、どし〳〵友達と遊ばすがよい。そうでないと人にたよらないで、自發的にやる素地を作る機會を失ひ、子供の生活を不具なものとする。

常に母親の尻を追つて居る子供は近隣の人といかに生活すべきかと云ふことを學ぶあらゆる機

會を失ふ。家庭を離れて入學する時既に力、勇氣を缺いで居る。この缺點が一生涯の損失を招くことがある。

大概の母親は子供のあまへるのを大變よろこぶ。これは子供を「甘つたれ」にする危險がある。自分の子供が獨立して行くのを嫌がる母親がある。自分に纏ひつき、自分が食べさせてやらないと食べない、添ひ寢をしなければ寢ないような子供を好く。この現在の母のよろこびは後年苦痛を招く。

子供が極く幼少の時から獨立を主張し、責任を擔當するのは自然で而も正しいことである。若し必要なら試みさせなさい。そして失敗させなさい。子供は試み、失敗して居る中に學ぶものです。子供が徐々にしかやり得ないことや、子供には困難な事はやつてやれば容易だが、暫時待つて、時間を與へて自分獨りでやらせなさい。兩親に依賴する習慣をつけると成長の曉、獨り立ちをすることが殆ど出來なくなる。

極く幼い時から自分が欲しいからと云つてすぐ自分のものとはならないことを知らせなければならぬ。彼の欲求するものを何でもやる樣にしてはならない。自分の欲求を或る場合は棄てなければならない習慣、又自分が欲しい時でも他人に與へる習慣を養成しなければならぬ。

なぜころ云ふ風にしなければならないかと云ふ道理は多分子供にはまだ理解出來ぬだらうが、こういふことをすると賞められ、又他人を愉快にすると云ふことを經驗する。このようにして成人してから失敗、失望に雄々しく直面出來る樣になる。

守る氣もないのに、又守ることが出來ぬと知りながら約束してはならない。

「サア太郎やおとなしくしなさいね、そうしたらお菓子を澤山買つて上げますよ」「これをしなさい、そしたら壹錢上げます」

間もなく太郎は壹錢では不滿になる、貳錢、參錢與へなければならなくなる。

報酬を貰ふ癖がついてから、若し子供が云ひつけられたことを熱心にした、その時に不注意にも報酬を忘れたとすると、どうなるだらう。子供は直ぐ欺されたと知る、親達は屢々子供に云ふことを聞かせる爲に虚言を云ふ。このことは大抵無意識になされる。そしてその結果は子供が眞理を尊敬せず他人の云ふことに信用を持たなくなる 。

又子供をおどして親の思ふまゝにしようとする。がこれも惡い。若し云ふことを聞かぬとこんなことがおこりますよとおどしても若し云つた通りのことがおこらないと、おどしがおどしにならない。所が親達はよくこの意味のないおどしを使ふ。

「おとなしくなさい、餘り騒ぐとお醫者さんが舌を切つちやいますよ」「止めなさい、そうでないと巡査さんをよびますよ」「やかましい、靜かになさい。止めないとぶちますよ」「お母ちやんをこまらす子供はね、乞食爺さんが連れて行つちやつて、もうお家へ歸へれませんよ」こんなおどしはよく使はれるが、その結果は、

一、成人の考へも及ばぬ位深い恐怖を與へる。子供の恐怖は大きな不幸を招く。

二、そんなことは決して起らないことを知つて最早おどしにならない。

どちらかの結果を招く。いづれにしろ好しいことではない。

親達は子供の信頼出來る友達でなければならぬ。

子供が自分の困難なこと、疑惑の解決を親達に相談する樣になつたら、その親達は實に素晴しい立派な人だ。若し親が冷淡で、子供に不快な感じを起さす樣だつたらこんなよい結果は得られない。

日々の出來事はどんなことでも子供の思考の對象になる。子供が下す判斷、說明は吾々に不可解で、正しい判斷でないものが多い。

子供が知つてはならない事を、子供に知らせない爲に、子供に了解出來ない樣な言葉で話す

と、子供は非常に當惑する。

子供は聞いたことを、どの位了解するか知つて居る親は少ない。

子供の面前でその子供のことを話したり、笑つたりしてはならない。自意識が急速に發達させられる、子供は何がなんだか譯の判らない笑に依て傷つけられる。或は誇示して、もつと他人の注意をひかうとする不健全な欲求が生ずる樣になる。

子供を相手にするのは成人を相手にする樣に謙讓を以てしなければならぬ。子供は自分自身の仕事と目論見を持つて居る。若し子供自身の仕事なり目論見が是非中斷されなければならない時は說明を與へ、そして子供の考慮を求める樣になさい。

小さな娘の子が父の傍で愉快そうに遊んで居る時、母親が別室から寢るんだから早くお出でなさいと呼ぶ。二三分したら子供の今やつて居る遊戯が終るだらう。母親もこれも知つて居たら、暫時待つてから呼んだであらう。泣き出しそうな顏をして父親に「だつて、お父ちやん、寢るのは嫌、これを終までしたいんだもの」と云ふ。父親は子供の云ふことが判る。で「それは惡いね、母ちやんはもうお前の遊戯が終りかけて居ることを知らないんだから、若し知つて居たら終るまで待つて呉れたゞらうがね。まあいゝ、云ひつけは云ひつけだから、お聞き、早く行つて寢なさい。」そうすると子供は行つて寢る。こんな風に一方子供の失望に同情するが、雄々しく直面することを期待することを示し、他方母親を扶けて云ひつけを守らせる。全く合理的な思慮深いやり方である。

子供の訓育の大眼目の一は兩親が一體となつて子供に對することである。

親になることはこの上なき立派な又重要な仕事である。この仕事を完全に果すことは困難だらう。學ばねばならぬことが多くある。然し、正しい愛、健全なる常識、子供を理解しようとする努力がありさへすれば兒童の多くの問題を賢明に解決することが出來るであらう。

第二章　習　慣

成人の健康、幸福、能力は幼兒時代に得た習慣に大に支配される。親達は子供の精神生活を理解し、好ましい習慣を發達させ、好ましくない習慣を放棄する方法を知らなければならぬ。

「習慣」と云ふ言葉は極く普通の日常語で今更議論することは不必要の樣に思はれる。が然し問題は極く平凡に見える所に在る。

幼兒時代に正しい習慣をつけることの重要なのを餘り氣にしない人々が非常に多い、甚しきに

至つては全く無關心の人すらある。

習慣を常識的に定義すれば、習慣とは以前になされた所を繰り返へす傾向であると云へよう。習慣は單に行動ばかりでない、思考、感情にも存在する。身體に關する習慣、例へば食事、睡眠、入浴、排泄の習慣の如きは容易につくられ、而も健康に重大な影響を及ぼすものである。

人間は常に種々の動作姿態を示すが、この動作、姿態は習慣の結果出來たものである。人々は何等考へる所なく粗野な動作をなし、或は優雅な樣子をする。筋肉運動が繰返へされることに依て習慣的になる。その結果ピアノの演奏が出來、タイプライターを使用出來、種々のスポーツに熟練するのである。

勿論子供は初め、簡單な動作を學ばねばならぬ。例へばナイフ、箸の使用法、帶の結び方、ボタンを掛けることなど。

飲酒、他人の財産、性の問題に對する態度とか、正直、不正直などは子供時代につくられた思考の習慣に關係することが大きい。

人々の有する多くの偏見は子供時代に作られた思考の習慣の結果である。

種族感、宗教感が後年他種族或は子供時代に養はれた異教徒に對する種々の態度になつて表は

れる。これと同じことが同じ社會の內に住む人々に對する態度にも云へる。

故に早くからこの點に注意し、人に對するよい態度國家に對するよい態度を教へなければならない。それには先づ何よりも家庭で、そんな雰圍氣を作ることが大切である。すべて、これ等の習慣と云はれる思考或は行動の傾向は、教育と經驗との產物である。そして幼い時程容易に而も早く習慣がつき年齡の長ずると共に困難である。ある行爲が繰り返へされ、ある思考に耽けること多くなれば、そこに習慣がつくられる。

この樣に、習慣は極く初期に初り、一生を通じて固定され勝ちであるから、好ましい習慣をつけるように力說されるのも大に理由があるのである。幼い子供は新しい習慣を容易に獲得すると云ふ特質を持つて居る。その理由は

(一) 子供は被暗示性に富む。即ち偉いと思ふ人の云ふことゝなすことはすべて無批判に受け入れる。「私のお父さんが、そう云つた。」とか「私のお母さんがそうする。」と云ふことは子供に取つては、なしたことを絕對に正しきものとする魔力を有する。

(二) 子供は周圍の人々の言語、動作、態度を摸倣する傾向を有する。

(三) 子供は自分の好きな人々を喜ばそうとしたがる。そして賞めて貰ひたい心が盛である。最

初は父母或は家庭の人々に賞められたいのだが、少し大きくなると幼稚園や小學校の先生に賞められることを願ふ。九歳から十歳になると遊び友達とか、仲間の餓鬼大將の褒貶が何物より重大なことになる。

この時期になつて子供が惡くなつたと心配しなくても宜しい。それは全く子供の蹈まねばならぬ自然の階梯に過ぎない。只この期に注意すべきは、よき友を選擇してやることです。自分のしたことを他人がどう云ふ風に考へるかと氣にするから兩親達はこの點を活用して正しい行爲を發達させる樣にしむけると宜しい。

殆んどすべての子供は何をやるにしても誰かの贊成を要求する。故にしたいと思ふ行爲の贊成を克ち得るのはよいことであると云ふことを體驗させるように訓育するのが宜しい。

自己犧牲、親切、寛大の行爲をほめてやるがよい。そうすると、こんな行爲を常にする樣になる。

親達の中には子供が同情心をあらはすと、これをもてあそぶものがあるが遂には子供のこの自然的な同情心を延び切つたゴムの樣に用をなさないものとしてしまふ。

「靜かになさい。お母さんは頭痛がするよ。」と云へば子供は最初同情する。然し子供が面白い

遊戯に熱中して居る時にこんな言葉を屢々使つて子供の遊びを邪魔するとかたくなゝ心になつてしまふ。ほんとの同情は人格の最も美しい性質の一であるが、これは訓育に依て發達させ得る。そして親切と云ふ一つの習慣の根底を作り、人を了解することを知るようになる。

兒童の精神生活の特長は可塑性で、これあるが爲に、幼兒期にかならず起る數多の變化に兒童が適應出來るのである。成人期に於ける適應性も矢張りこの可塑性より來るので、この性質を失はぬ人は幸福を得、能率を上げることが出來る。

兒童が日々新しい反應の仕方を獲得して行くのは全くこの心的狀態から來る。

この性質がなければ新しい習慣を形成し、古き習慣を破棄出來ないのである。實にこの本能的傾向あるが爲に習慣形成を可能にさせるのである。

子供は單なる肉の塊ではない。子供の心はその肉體よりも、はるかに複雜な、そして微妙なもので、これを統整するには甚だ骨が折れる。

子供は實際精神生活を營んで居る、希望、歡喜、野心があり、疑惑、心配、悲哀がある。

家庭は兒童の人格品性が習慣に依つて陶冶される道場である。

第三章　食事の躾

母親としての第一になさねばならぬ仕事の一は子供に適當な榮養を與へることである。子供の身體は實に繊細微妙であり、又大人でもそうであるが、子供の感情生活は肉體との關係が密接である故に榮養問題に就いては、熟練した小兒科醫に依つて取り扱はれるのがよいのである。然し屢々子供の榮養とか子供の食物に對する態度に就いて色々難しいことが生じて來る。これ等は單に身體上の問題としてのみ說明し盡されない。

與へられた食物を取らない原因となる色々の身體上の條件を見てこれを診斷し、適當の醫療を施し、そして身體的には健全と認め得るにもかゝはらず、與へられた食物を食べない場合がある。此處に問題にしたいのはこんな種類の場合である。即ち食事を取らない身體的條件は除去されたにもかゝわらず、與へられた食物を取らないような場合を問題とする。こんな場合の最も普通なのは、

一、與へられた食物に全然手をつけない。

二、嚥下しない。

三、無理に食べさすと嘔吐する。

經驗によるとこれ等の惡癖は家庭の狀態に依つて容易に說明される。

(一)　兩親の子供に對する態度。

(二)　食物の選擇の宜しきを得ぬこと。

(三)　肉類を餘り重要視すること。

(四)　食事時に、不快な感情が結びつく樣な場面を經驗さすこと。

すべてこれ等の事情がこの問題を益々困難にして居るのである。

多くの兩親達は食慾減退は直ちに不健康と結びつけて考へる。爲に子供に食慾がないと兩親は心配するのは極く自然であるが、然し前途の色々の食事上の惡い癖と食慾減退との間には何等の關係ないことが屢々ある。事實この惡い癖を持つた子供は決して榮養不良な子供のみではないと云ふことは注目に價する。問題の歸する所は通常、食物の性質、食物の取り方、母親が子供に適當な榮養を與へようとする努力如何にある。

母親の極く普通考へ違ひすることは子供にいつも同じ量の食物を食べさせなければならないと考へることである。故に每食事を完全に食べなければならないと考へることにある。その爲、子供

が一定量を食べないと、母親はどこか身體が惡いのではないかと心配し、いら〳〵するのである。

榮養狀態は子供の健康の重要なる指標の一ではあるが、どんな子供もいつでも同量の食物を取らなければならないことはないし、ある時期を通じて同じ體重を保持しなければならないと云ふ譯ではない。一食や二食取らないでも何等特に害があるものではない。兩親が前述の如き不當な杞憂を抱く爲、子供の日常生活に於ける他の色々の方面よりも食事についての心配、關心が大げさになりたがるものである。次のは大分極端な例ではあるがそのよい一例である。

父親は肺結核で死亡、それで母は子供が同病に患ることを非常に恐れた。母の唯一の希望は娘が肥えてバラ色の健康體であることであつた。母親が餘り心配し過ぎる爲、家庭に重々しい空氣を作り出した。一日に三度の大量の食事が與へられた。爲に娘は食慾を全く失ふた。然し母が怒るので恐れて鵜呑みにする。或は氣分の加減で、母がすかして一寸でも食べたら何か好きなものを買つてやると云ふ迄待つて居ることもある。父親の居ない單調な日々の暮しの中で食事時は子供が主役を演ずることの出來る一小劇が展開される機會を惠む。食事そのものはそつちのけ、すべては子供の望み通りになつた。

この娘は食べても食べなくても、母親を自分の意の如くあざやかにあやつることが出來る。母は晝食の時娘が朝食を取らなかつたことを思出す。それから一時なだめたり、しかしたりおどしたり、母は色々試みる、然しどんなことをしたつてこの女の子は讓るまいと思へば讓らない。或はむら氣から、母親が傍に座つて食べさせて呉れゝば食べることもある。そこで食事が終る。そこにたま〳〵やつて來た隣人に母親がその話をして、隣人の同情を求めて居るのを聞く。多くの人間は『普通でない』『變りもの』であることを好む。そして母に云はすとこの娘の子は全く『變りもの』に違ひない。だから、この子がこの役割をどこまでも維持しようとするのに何の不思議もないだらう。

消化機能と感情狀態との關係は密接である、食慾は怒、嫉妬、悲哀、歡喜に依て影響を受けることが大きい。子供の感情は成人の感情よりは大に不安定で而も起發され易い。食べたくないある食物を食べる樣に强ひられ、又生理的要求以上の食物を强ひられた子供が母の食べさせようとする努力に報ひないで食事を一口だつて取らないのは理解するに難くない。

嘔吐は全く純粹な生理的過程に過ぎない。然し若し嘔吐が兩親達に不當の注意と心配をひき起した時は、他の機會にも全く異つた理由を以て、繰返へされる。即ちたゞ親達の注意を引きたい爲にやる樣になる。

食事時には子供の心を平靜に而も愉快にならせる樣努力がなされなければならない。若し子供が疲勞したり、むづかつたり興奮して居る時には食思缺亡を呈する。そして食事が不味い。食事前三十分位は休養させるが宜しい。子供が食べるや否やが母の重大なる關心事であると子供に感じさせること程惡いことはない。親達は自分の心配などは隱しておいた方がよい。そして食事時は日々の愉快な而も普通なプログラムの一部分として取扱ふべきである。

若し、何かの理由で卓上にならべた食事を食べることが出來なかつたり、或は食べようと欲しないならば食べる樣に無理强ひをしてはいけない。又そのことに就いて話してはいけない。食べたことのない食物が食卓に並ぶ、子供は食べない、こんな時餘り食べよ〳〵とすゝめると却つて、その食物に反感を持つ樣になる。食べたことのない食物が初めて食卓に現はれた時、子供が食べないと、永久に食べない樣に母親達は思ふが、決してそうでない、こんな場合には子供に不快な感情を抱かす樣な場面を釀し出すことが一番危險である。その食物と不快な感しとが聯合して、次にその食物が食膳に上せられた時にも食べないようになる。同じ食物でも食べさせ方のよしあしで食慾を增減さすものである。子供の好きな食器とかテーブルで食べさせたり、母が平素座る所に座らせたりすることは非常に有効だ。時々子供に好きな食物を選ばせるとよい、然し決して常に自分の選擇通りになると思はせてはならない。若し彼が大きく、强く、彼の尊敬する『父』の如くならうと欲すればこんな食物を食べなければならないと敎へるとよい。然し決して無理强ひをしてはならない。

別にはつきりした理由なしに食べたくない場合が往々ある。又兩親に心配懸念を與へたい樣な氣分になつて食物を食べない事もある。こんな場合、子供が御飯を食べたくないと云つたら、宜しいお腹が空いて居ないなら、外に出て遊んで來なさいと云ふが宜しい。子供はぶつかゝつて來ようがない、子供は今後決してこんな氣分から御飯を拒絶するようなことをしなくなるだらう。

又子供はよく摸倣する。例へばお祖母さんが偏食で食物に好嫌があつたり、父が赤裸々に好嫌を述べると、子供は食物に氣むづかしい子供になる。だから家族の人々が何でも食べるようにすれば子供は摸倣性に富むから何でも食べるようになる。

生理的に云つても又その外の理由から云つても、明かに若し子供が食物は何時でも食べられると思ふと一定の時に食べるのに無關心になる。故に一度定つた時に食べなかつたら次の食事迄決して何も與へてはならぬ。母親だけでなく、家族一致して間食を與へたり、間食を買ふ金錢を與へたりしてはならない。食事中は急がしてはならない。が又食事しながら遊んだりさせてはならない。

ぬ。普通食事はせいぜい三十分以上かゝつてはならぬ。若しそれ以上に達したら、默つて食物を撤回するがよい。

第四章　子供の嫉妬

社會的見地から云つて嫉妬程大きな意味を持つ感情は先づない、而も又この感情程その發達が子供時代の環境に左右されるものはない。嫉妬は進んで「怒り」或は「嫌惡」を惹き起す。嫉妬する者は自分は自分の友人、隣人に劣つて居ると感ずる、又自負心を傷つけ自尊心をなくする、嫉妬は復讐の欲求を生み、或は無關心の假面をかむり自分の眞實の感情を隱すようになる。

嫉妬の傾向を有する人々はそこらあたりによくある。戀愛、友情のみならず人の幸運にも嫉妬を感ずる。こんな人には喜びも幸福もない。他人が成功したり幸福になればすぐ嫉妬を感じ心の平和が破れるのである。

子供の嫉妬を最もよく惹き起すのは弟や妹の出生である。三四歳になつた時全く突然、新しい弟や妹が出來、今迄自分につききりだつた母親が新しく出來た弟や妹に氣を奪はれて終つて居るのを見る時には嫉妬を感ずるのも無理からぬ。

子供は悲哀と不安とを感ずる。

屢々子供は産褥中他處に預けられる。これが家庭を離れる最初であらう、そして成人はこのことが子供にどんな意味があるか知らない。子供の世界は全く顚倒してしまふ、一體元の家に歸へれるかどうか子供には判らない。この事に就いて子供は小さい頭を惱ます。時々もう直ぐお父さんやお母さんの所へ歸へるんだと聞かされる。が然し歸つて見れば、自分の位置は新しく生れた子供が奪つて居る。

或は出産の時子供は家に居殘つて母親が病院に行くかも知れない、それについて何等說明も聞かされない。この場合でも前同樣、子供の世界は顚倒される。何故お母さんは彼を殘して行つたか、母親は眞實再び歸つて來るのかどうか判らない。成程歸つて來る、然し前同樣、自分のみに注意を向けて呉れない。母の愛と注意は分割されなければならぬ。赤ん坊に對する嫌惡の感情が起つてくるのである。

然し、若し、新しく弟妹の生れることを、前以て打ち開けて話してやれば、赤ん坊に對する嫌惡はきつと惹き起されないですむだらう。こう云ふ風にすると子供は興味と喜びを以て、待ち受ける。このように巧くさばけば、子供の生活で最も不愉快な事が樂しみと變る、世話をやいたり

保護をしてやる新しい遊び友達が出來るよろこびが生ずる。この責任感が兩方の子供に有効に働くであらう。

若し、何かのはずみで、子供が赤兒に嫉妬を感ずる樣になつたら、この態度を助長する樣なことがあつたり、冗談事だと思つて見逃す樣なことがあつてはならぬ。

子供の感情をおもちやにしてはいけない、危險だ。賢明なる兩親は、子供が以前と變りなく愛され、又家族の重要なる一員として待遇されて居ることを子供に納得させる色々の賢い方法を見出すであらう。子供に、も少し多くの時間と注意を與へ、子供が愛する人々の愛情を依然として保有して居ることを確信させさへすれば宜しい。

又屢々他家の子供を可愛がると、子供は著しく嫉妬を示す。不幸にもこうしたことがどう云ふ意味を持つか理解しない兩親は、子供の憤怒嫉妬を見て虚榮心を滿足させる。この嫉妬の興味ある發揮が親達の氣に入る、そして『かしこい』と云ふ。そしてこれを助長する樣に努める。お客のある時などはお客に見せる爲に故意に嫉妬を惹起さす樣なことすらする。

一例を示すと——父親が毎日の仕事から歸つて來て赤坊をあやして二歳になる子供を無視して怒らすのを娯みにして居た。こう云ふことが續いたので五歳の時にはその子は、家庭の者には勿

論、遊び友達からも嫌はれ、妹達に挑みかゝり、惡いことをする樣になつた。これは勿論極端な例ではあるがこんな狀態は普通の人が考へるよりももつとあり勝ちなものである。

更に、自分の兄弟姉妹が常に賞められ、おまへもあのようになれと云はれ、自分の缺點短所ばかりを指摘されると、嫉妬を感ずるようになる。又その他の子供は無視して一人だけ、その才能をほめてやることより危險なことはない。他の子供に苦感、憤怒、劣等感を感ぜしむるのである。

子供の嫉妬心をどういふ風に取扱つてゆけばよいだろうか。

子供に嫉妬を出來るだけ發達させない爲には子供の普通の特色である自己中心をうまく取り扱へばよい。

子供は家庭と、彼の生存する社會に對して義務を有することを教へられなければならぬ。出來るだけ早く、他人に關係した彼の言行は如何にあるべきか、又いかに、それが影響するかを考へ初めなければならぬ。彼は繰返し〳〵こんな態度はこんな場合には宜しいとか惡いとか云ひ聞かされる。彼の喜びと他人の喜びが家族の人達に依つて考へられる事が判る樣な境遇に生活する。この樣にすれば子供が自分で理性を働かすことが出來る前に、暗示と摸倣に依て習慣が獲得されるだらう。

嫉妬深い子供は幼兒期に於て自分以外のものに興味を抱く機會がなかつた子供に多い。獨り子は自己中心になる位置にある。特に獨り子が繁華な都市に生長し、限られた場所に住み、母以外の友もない時は、この事は著しい、彼は確かに彼の範圍内ではあらゆるものゝ王である。然し、彼の王國は餘りにも制限され過ぎて居る。彼は他の子供の活動、興味を知る機會を持たない。

同じ事が程度の差こそあれ、幼兒期に他の子供と接觸する機會なく、心配性な母とのみ遊んだ子供に於ても同樣だ、こんな子供も又自己の重要性を印象せしめられる。

屢々一家庭の一人の子供が特に兩親に依て可愛がられる。こんな子供は後年、他人の長所を理解出來ない、そして權威を受け容れず、又これに對して憤怒を感ずる樣な人間になる。

家庭では子供の個人的愛著が最も强く、その爲嫉妬を感ずる機會も多い、故にこゝに於て生ずる色々の狀態に巧みに適應出來ることを學び、自己中心ならぬ習慣をつけられるならば、家庭外に出た時でも巧みに適應出來るであらう。

若し獨り子の時は、他家の子供と交はらすよう處置を取らねばならぬ。假令街上で危險なことがあるとも又、言葉つきが惡くならうとも。

子供は、自分の玩具、菓子、繪本、を他の子供に分つ樣に敎へられなければならぬ。遊戯の際には、團體の爲を圖り個人的功名心を滿足さすようなことをしてはならぬ。若し負けた時には敵の優れたことを認め微笑を以て受け容れる樣に敎育しなければならぬ。子供は特に一つに優れるよりは多くの遊戯を可成の技倆を以てやり得るようにしなければならぬ。

子供にも成人と同じく、自己の得意なものに嚙りついて、不得手なものに見向もしない傾向がある。非利己的な行爲は、褒めてやらねばならぬ。又時には物質的の褒賞をやつても宜しい。非利己的は結局利益を得ると云ふことを經驗に依て知ることは子供に取つて無益なことではない。

嫉妬深い子供は嫉妬深い男や女になる。子供として、自分の遊び友達と巧くやつて行くには無數の困難に出合ふ。この爲に失敗と恥との感じを發展せしめ、遂に大きなハンデイキャツプを作るに至る。虐待され、無視された樣に感ずる。彼の自己中心は著しくなり、遊び友達から離れ、生活の活動力を全く失ふ。或は專制的になり、自分を注意の的としようとして努力大に努める。後年に至つてこの爲他人の喜を共に喜ぶことが出來ず、又他人の成功に憤悲を感ずる。嫉妬深い人間は嫌惡の的となる。自分は不當に取り扱はれ虐げられて居ると云ふ考を屢々發展せしめる。而てこの考は屢々なんとも仕樣のない憤りと不幸な結果の原因となる。

皆さん方のお子さんを研究して下さい。なぜこの子供はこの樣に振舞ふかを研究して下さい。

この子供は、喧嘩好きなか、傲慢なか、この子供は氣むづかしく、怒りぽくはないか。或は內氣で大人しく、お行儀のよい子供で常に控目であるかもしれない。子供の考を理解しようと努めて下さい。

子供の示す態度は、子供が實際に感ずる所と正反對であることがあるのをよく記憶しておかねばならない。攻擊的、鬪爭的、であることは失敗と落膽との感情的假面に過ぎないのかも知れない。消極的な無關心はその底に深く傷ついた感情を持つて居るかも知れない。他方子供の行爲は摸倣の結果であることもある。即ち尊敬する成人とか、交る友達の摸倣であるかも知れない。皆さんの子女に就いてゆつくりお考へ下さい。こうして費された僅かの時間が後年極めて有効に過されたものであつたことがお判りになる時があるだろうと思ふ。

第五章　子供の恐怖

恐怖は人間が經驗する最も普通の感情である。それでは子供は先天的にある特定のものを恐怖するのであらうか。これは非常に疑はしい。大概の恐怖は乳兒期、幼兒期に受けた經驗に依つて生み出される。子供の恐怖には實に馬鹿氣切つたものがある。然し、どうしてある經驗が子供の心に深くきざみ込まれ、それが永い期間に亘つて子供の行爲を支配するか。これを理解することが成人には不可能な爲に子供の恐怖が馬鹿氣た、理窟のないものに見えるのである。多くの親達は罰として、或は云ふことを聞かせる爲に脅かす。そして脅した結果がいかに子供に致命的な恐怖を與へたかを眞面目に考へない。親達は恐怖の原因を探求しようともしない。

恐怖には二つの型がある。即ち客觀的のものを恐れるのと主觀的な恐怖とがそれである。前者は見たり聞いたりすることの出來る事物に恐怖を感ずるので動物、巡査、醫者、雷、鐵砲、高所などである。後者は理解し難く、その原因を發見するのに困難である。主觀的恐怖とは子供が實際見ることが出來ない、成人から聞いたことのあるお化とか地獄とか死に對する恐怖を云ふのである。

客觀的恐怖は了解が容易で、これに打ち勝つのも比較的容易である。あることを經驗し、それに恐怖を覺へたとしても、子供は忘れることがよくある。又たとひ思ひ出されたにしても、素直に說明してやれば恐怖が取り去られる。

ある子供は新しい者とか見たこともないものを恐れる。然しこれも徐々に慣らせば恐怖を感じなくなる。訓練するのだと云つて、子供の恐れる所に無理に子供を連れ込むことは誤つたやり方

である。小さい子供が海で最初泳がされると恐れて叫ぶ。こんな時に無理に投げ込んだりすると水を恐怖するようになる。そして容易に拔けぬものとなるであらう。

動物恐怖は非常に早く現はれる。若し動物に實際脅かされ或はよい子にならないと動物がさらつて行きますよと脅かされた經驗がないのなら、子供が動物を見慣れるとすぐ消滅する。

云ふことを聞かないと巡査がつれに來るとか化物がさらつて行くとか云つて脅される。或はポロ買に呉れてやるとか云ふ。

子供に云ふことを聞かせる爲に醫者に連れて行くと云つて脅すがこれは不幸な結果を招く。子供が病氣になつて醫者におとなしく診て貰はねばならぬ時に大に困る。

決して親の不注意ではなかつたのだが子供に取つて不快な經驗が生じ、これが原因となつて恐怖が生ずる、そしてこの不快な經驗と單に聯合されたと云ふだけで以てある物が恐怖の對象となる。例へばある子供が醫者の所で痛いめに合つた、その爲に醫者の家らしい所に這入るのを恐れる。これは脅しに依て產み出された恐怖とは種類の異つたものである。實際の經驗に依て得た恐怖は恐怖を惹き起した同一の狀態ともつと愉快な事とを聯合させ恐怖を除去さすことが出來る。或はこの恐怖に勇敢に直面するよう子供を勵すのも宜しい。

子供はすぐ兩親の態度を模倣する、親が勇敢であれば子も勇敢に、物怖ぢすれば子供も物怖ぢする。多くの母親は自分自身が子供は氣づいて居ないと思ふ時、あるものに恐怖を示したことのあるのを忘れ、何故この子供は雷とか動物を恐れる樣になつたのかといぶかる。

この一例を見よう。花子の母親は花子が暗闇と、すべての見馴れないものを恐れた。母親はこれは自分から遺傳したのだと思つた。花子は夜中、起きて誰か窓をよじ昇つて來ると云つて叫び泣く。母親はかつてある晩獨り家に居殘つた時の恐怖を思ひ出した。その時あらゆる物音がしのび入る强盜を思はれた。又この母親は子供時代に多くの幽靈話を聞いた。そしてこの話を花子には話したことがないと云ふが事實は、花子の居る前で昔聞いた幽靈話を話したことがあつた。この子供の『遺傳的』恐怖が眞實はどこから生れたか理解するに難くないであらう。若し子供が大きな音とか閃光、雷鳴、電光、銃聲などを恐怖するなら兩親が賢明な暗示を與へさへすれば漸次なくなる。模倣は恐怖に於ても重要な役割をすることは前述の例でもよく判ると思ふ。も一つ別の例をあげると航海中船が危險に瀕した時を見れば、よく判る。恐怖に驅られた人が救命船にだれを打つて驅けつける。所が落着いた恐怖しない士官は差迫つた恐慌を靜め事態を制禦する。

主觀的恐怖はその原因をたどり、これを消滅させることは大變困難である。或人は子供がこん

なことを考へて居ると夢にも思はぬ程漠然とした理解し難いものを考へて居ることが屢々ある。

ユーゴーが子供時代を回想して云つて居る。

「一度云はれた事は心の底に沈澱する。頭に泌みこんだことは屢々立ち歸る。單純な幼兒の胸には多くの說明されない奇蹟が巢くつて居る」

例へば死に就いての漠とした觀念は一般に考へられるより以上に子供の苦惱の因となる。

ある子供には死とは穴に埋められることを意味し、他の子供は生きたまゝ埋められはしないかと恐れる。この常に存在する死の問題に就いての子供の漠然とした想像をすべて述べることは不可能だ。然し一般の子供に死の概念を與へ、死に關する恐怖を和げることは困難ではない。

も一つの子供に共通した恐怖は獨りぼつちで置かれることである。これは、若しよい子にならないとお父さんもお母さんも出て行つて了ふと脅されることから來る。

ある母親が入院しなければならなくなつた。母親は三歲になる女の子に、一寸買物に行くと云つて出掛けた。子供は窓に寄りかゝつて歸りを待つた、時が立つに從つて、恐怖を覺へ初めたその中一度大きな建物の傍を通り過ぎた、そこの窓から母親が寢着を着てのぞいて居るのを見たが、話はしなかつた。幾週間もの後、母親が家に歸つたが、この子は若し眠るとその間に母が又

行つて了ひはしないかと心配して夜眠らなかつた。獨りぼつちで放つて置かれることに對する恐怖は言葉よりは寧ろ母に對する子供の態度によく表はれる。この恐怖がある爲に他の子供と遊ぶのを止めて母の傍にくつゝき十一、二歲になつても母が眞實に家に居るかどうかを屢々見に歸る

冗談に云つたことが子供には大變な心配となることがある。ある外國の大學教授が、子供時代に、或る人が若しパンと蜜とを一緒に食べると角が生へると云つたので幾週間も苦んだことがある。

彼は直ちに食べることを止めた、そしてその理由は說明しなかつた。笑はれはしないかと云ふ恐があつたから。額に突起が出來た樣に感じた、心配の餘り母親に角が出來てますかと云つた。母は何か遊戲とでも思つたのか『ふ、確かに出來てますよ』と云つた。その教授は未だにその時の苦しい經驗を感ずるそうだ。

恐怖は人間行爲を驅使する力である。恐怖はある事をなさしめ、或はある行爲を制止させる。危險を避けしめる。ある程度の恐怖がなければ人間は生きて行かれない。恐怖を根絕させることを話したつて無益だ、恐怖が災禍とならず防衛の方法となるように子供を訓練するのが最も重大である。子供は罰と危險を恐れなければならぬ。長じては自己の良心を恐れなければならぬ。幼

年時代を不合理な恐怖の重荷で送ることがあつてはならぬ。恐怖は時々神經質と不眠に導き愉快に遊べなくするものである。

第六章　子供の怒

怒は誰でもが時々經驗する激情である。これは激しい感情でその結果好ましくない行爲に屢々導く。特に子供はそうである、子供は訓育と經驗とが足らない爲に適當な自制心が發達してない、それで自分の怒の原因になるものに對して惡意ある態度を取る。

怒は本能的傾向が阻止された時に屢々起される。子供は積木が積み上げられないとか、玩具の汽車が動かないとよく怒る。思ふ儘にすることが出來ぬ爲これ等のものを破壞しようとする。又子供は—成人だつてそうだが—自分の欲求が阻まれ、誇、自尊心がそこなはれると怒る。恐怖はけ口がないと怒に變る。故に怒は各人が生活する環境に於て働く無數の原因に依て惹き起される。そしてその表はれ方も種々ある。

子供の怒を取扱ふに際じてはある行爲が怒の表現であることを確めるのみならず、出來るだけ怒がいかにして起されたかを見きはめる必要がある。例へば二週間に亘つて窓硝子を破壞する子供に就いて色々調べたことがある。

先づ彼が窓硝子を壞はすのは、怒つた時であることが判つた、次に重要なことは、この怒と云ふ激情を惹起さす環境の條件を發見することであつた。この場合憤怒の起つたのは嫉妬の爲であつた。がその他の色々の感情例へば自分では不當だと感じた罰を受けたことに對する無念、或は學業の失敗、勝負事に負けたことに對するくやしさなどが加つて居たらしい。

子供の憤怒の問題を取り扱ふ時にはその怒の理由と云ふことが重要になつて來る。重要なることは怒ではない。怒は單なる危險信號に過ぎない。怒の依て來る根本的原因のあることを警告する危險信號に過ぎない。

怒を制御出來るようになるのは禁止、抑制の作用が發達する點に俟つ。で若し子供が自制ある、有用な人間になるべきならば幼兒期に然るべき訓練を受けねばならぬ。

怒るのは必ずしも彼の利益にならないと云ふことを學ばしめるのが最も重要なことである。

子供の憤怒の極く普通の表はれの一は癇癪玉の破裂である、これは四肢をじたばたさせ叫聲を上げ實に劇的な表現をなす。又一方には或子供はすねて、氣むづかしくなることもある。兩者の內後者の方が子供に取つてはより大きな害となる。遂にはくよ〳〵物思ひに沈み、報怨的空想に

耽るに至る、その結果は子供の興味は內攻して、精力は、事實ないことを、「かうあつたとしたら」、「かうでありたい」と云ふ空想生活に浪費されてしまふ、癇癪玉の破裂の方は、その時は望ましくない事が起るかも知れないが、それが過ぎれば青天の如く晴れ渡る。多くの子供の激情は永つゞきしない。そして極く正常な而も健康な反應に過ぎない。事實決して怒つたことのない子供と云ふのはどこか惡い所があるに違ひないと云つても宜しからう。然し、いつでも困難なことに出合へば直ぐいら〳〵したり憤怒したりする子供は後年に於ける性格上の缺陷を發展せしむる危險に曝されて居ると云ふべきである。

殆ど常に子供の癇癪は、その時だけにしろ、とに角直接間接に子供の利益となる。子供は我儘を通して貰へ、他人の注意を惹くことが出來る。又頑張れば勝ち得ると感ずるらしい。子供の憤怒の表現が實に物々しく仰山な爲に、子供の欲求を拒絕した人に取つては實にたまらない。それでつひ負けて要求を入れてやることになる。

驚く程の正確さを以て、自分の我を容れて貰へる時と場所を選擇する。斯樣にして子供は周圍のものを支配することが出來ることを直ちに覺えこむ、かうして元來怒の激情は當然起るべき狀態に依ておきたのだが、それが、他人の意志に望從しなければならないが嫌な場合を免れる爲に利用されるに至る。

四歲の子供が等閑に附され成人の注意を惹けなくなると何時でも、この方法を以て家族の注意を自分に集中するようになつた。第一に涙をぼろ〳〵こぼす、それから突きさす樣な叫聲を上げる。それでも思ふ樣な結果が得られないと、身體を床に投げ出して四肢をじたばたさせ手あたり次第に何でも拋りつける。かうなると先づ大抵家族の者が憐みを感ずる。でも然しそのまゝ放つて置くと、最後の切札を出す、叫聲も四肢のじたばたも止り今度は硬直狀態に陷る、息を止める爲、口の周圍が青くなり初める。それで終りだ。家族の者は彼の足下にひれ伏す。濡れた布を顏にあてがひ、彼の欲求するものは何でも、假令それが不可能なことであつてもかなへてやるやうに約束する。かうして自分の欲求を通して我に歸へる。こんなことを見たこともない人は實に誇張としか思はれないだらうが、事實である。實に恐るべきことだ、こんな狀態の子供に對抗し通すには强き決意と冷靜な頭を持たなければならぬ。

これ等はほんのありふれた場合を記述したのみである。この外にこんなに明白にあらはれない怒の理由があることを忘れてはならない。例へば、子供が遊戲を自分の計畫通り運ばせようと靜かにやつて居る。この折角の計畫も努力も、こんなことに關心を持たぬ成人の一言の爲に阻止さ

れ、或は妨害される。

こんな時子供が出來るだけ力强い方法で憤怒を示したからと云つて何も驚くに當らぬ。當然のことである。又兩親がいら〳〵して居る爲、その結果子供が憤怒を起すことがある。貴方は腹を立てないか、貴方の子供が不作法な行をした時に怒らないか、別に必要もないのに無暗と「止めなさい」「してはいけません」と云ひはしないか。多くの兩親達はよくやることだが、子供を怒鳴り散らして、云ふことを聞かせようとしてはいけない。こんなことをすれば、たゞ子供をいら立たせ、興奮させるに過ぎない。その結果は益々子供を取り扱ひ難くするのみである。一體自分の欲求することを通すにはどの位叫んだり、喚めいたり、手足をじたばたさせればよいか、子供は直ぐに覺つてしまふ。若し兩親が一致協力し、確固たる態度を取り、自らも又自制を學び必要ありと認める勇氣を有する時は戰は兩親の勝利に終る。

第一に激情を爆發させ易い子供は生來感情の不安定な子供である。即ち極く普通の緊張壓迫にすら、非常な疲勞を覺へる子供なのである。癇癪は子供時代の神經的疲勞の兆候の一に過ぎない。故に休養と睡眠を充分取らせ、覺醒中には精力的な遊戯をさせるが宜しい。

子供は家にとぢこめられ、遊び友達から引き離されてはならぬ。自己中心的で、拗ねたりする

狀態、常に緊張し、今にも爆發しそうな狀態にあらしめるのはよくない。買物に連れ歩いたり、映畫に連れて行つたり、芝居につれて行くのは宜しくない。そんな所では興奮し刺戟され過ぎる。

癇癪を起したら、どんな場合でもその原因を冷靜に考へなければならぬ。

子供のある重要な欲求を妨害した爲に、これに對する無意識の反抗として癇癪があらはれたならば、その欲求は何であるかを決定する爲にあらゆる努力を惜んではならぬ。そしてそれを取り除いてやる必要がある。或は子供のそれに對する態度を變更せしめる必要がある。

他方癇癪が習慣的になつたなら——即ち目的を克ち得る爲の手段となつたなら、或は他人の注意を自分にひく爲に利用されるに至つたならば癇癪玉の破裂は決して利益にならないことを思ひ知らさなければならぬ。一度確固たる態度が採られたならば、こんな方法で自分の目的を達する譯に行かぬこと、何等物質的利益もなく又稱讃も受けないことを間もなく悟るであらう。一度これが判れば癇癪は放棄されるであらう。

憤怒は必ずしもかゝる爆發的反應に依てのみ表はされるものでない。怒が强かつた爲一時的に身體運動の不可能を來すことが屢々ある。『怒の爲に痳痺した』とか『怒が大きかつた爲に言葉が出なかつた』とかよく普通に云はれる。この形式の反應は子供には多くないが存在する。屢々怒

が閉ぢ込められ、抑制されて遂には爆發點にまで達する。かう云ふ時に突然理由なく或はほんの一寸した原因から爆發するに至る。毎日接觸して居る者達に取つて、從來おとなしく控へ目であつた子供がなぜ突然こんなになつたか理由が判らない。

こんな週期的に見舞ひ而も一見理由のない激情の爆發は、兩親が平常注意して居れば避けられる。子供の一般狀態をよく知るがよい。何か神經疲勞の兆候がありはしないか、例へば手足顏面の痙攣、或は大筋肉のひきつけ或は瞬目運動など。睡眠は良好か食慾は宜しいか、便通はよいか。學校や遊び友達に變つたことはないか。健康狀態はよいか、他の子供達と仲がよいか、他の子供がいぢめはしないか。若しいぢめるとしたら何故か。同年輩の子供と遊ぶか、或は年長の子供と遊ぶか。弱者窘めではないか。學課の負擔がどんな程度であるか。自分の學年より以上のことを敎へられては居ないか、或は學年相當のことを敎へられて居るか。學課外の負擔が多すぎて戸外で充分遊ぶ閑がないようなことはないか。

どんなことを考へて居るか發見せよ、彼の問題は、希望は、失望は何であるか。若し不愉快さうに見えたら不滿の原因を見出せ。嫉妬を感ずることも、恐怖に惱まされることもあらう。或は性の問題にわずらはされることもあるだらう。他人に劣ると感ずることもあらう。彼をして事物を明白に、眞實の光に照されて見得るように助けてやらねばならぬ。兩親の義務とは、子供に衣食をどつさり與へたり、盜をしなかつたり放火しないようにするだけではない。もつと大きな仕事がある。子女を幸福ならしめること、日常の問題にうまく適應するように導くことが大切である。

第七章　子供の虛言

虛言は殆どすべての場合「盜み」と結びついて居る。この場合の虛言は告白の屈辱と罰を免れる爲の防禦手段の一として用ひられる、子供が自分を守ろうと努力するのは有り得ることだ。虛言がばれずに成功すれば努力に依て目的を達したと云ふ事實に滿足を感じ、力を感ずる。この事は特に過ちを包み隱す爲に意識的に利用した虛言の場合に於てそうである。最も惡い虛言は家族とか極く親しい人に對する嫉妬復讐の爲になされる虛言である。これは「讒言」とも云ふべきものである。

自分のしたことを誇大に傳へて誇る子供の虛言はまあ罪のないもので大して重大な結果を招かない。子供のこしらへ事はある程度迄正常な精神生活の一過程である。多くの子供は『お伽の世

界』に住む、そして子供が自分の夢の世界を物語る時、兩親はこれを工(たく)める虚言と取る、が動機が全く違ふ。子供に自分の話して居る世界は眞實の世界でないことを理解せしめ、又これを聞く人もこの點をよく了解して居れば宜しい。空想は子供の精神生活の發達に非常に役立つことが屢々ある。

ある四歳になる子供が非常になついて居た祖母が死んだ時、その悲しみの苦痛を柔らげる爲空想に避難所を求めた。彼は他の子供達に祖母が死んだのではない。ある都會へ行つたのだ、そして自分や他の子供をそこに連れて行かうとして居るのだと語り、遂にはその旅の愉快さを物語るようになつた。この自己僞瞞を以て祖母を失つた苦痛を柔げて居るのである。空想的遊び友達、白日夢は子供の精神生活では全く普通の心理的機構である。度々この白日夢が子供を刺戟して、夢を實現せしめようとして活動させるに至らしめる。然しこの白日夢が異常に子供の情意生活を滿足せしむる時は問題になる。故に白日夢の習慣を實世界から享樂と滿足とを得るに必要な努力に置き換へるようにせしめなければならぬ。

作り事ではあるが何かの役に立てようとしないもの、唯單に空想の產物であるのならば、それは夢であつて何ら事實性を有せぬと云ふことを認めさせる必要もなければ又そう云ふように認めさせるのが望ましいことでもない、たゞ次に述べるような態度を彼に見せるのがずつと宜しい、貴君をよろこばす面白い話を作り上げて居るのだと云ふことを貴君が充分認めて居ると云ふことを子供に印象さす。若し作り話が眞ではない作り話として親達には受け取られて居るのだと云ふことが子供に判つて居れば作り話をすゝめた方が否定して罰したりするより危險が少い。罰したりすると子供が自分の作つた話にローマンスを增加し、自己憐愍で滿たし、內省的になり、事實界から遠く離れて終うようになる。

病的虚言は早くから見られる、この種類のものは普通のものと異つて特徵がある。こゝには述べないことにする。

虚言は躾の惡い子供によく見られるもので殆ど常に盜、破壞、癇癪、嫉妬、恐怖と結びついて居る。だましてやらうとする傾向はこれを心配する兩親達に依て反て助長される。即ち子供の云ふことは何でも眞か僞か確めようと追求し過ぎるので虚言を云つて免れるより外に道がなくなる。

その一例を示すと七歳の男兒が夜尿の爲治療を受けて居たが、就寢前水分を多く取らないように云ひつけられた。母親を欺いて、表面は洗面に行くと云ひ、同時に水を飲んで居た。その他の

場合でも虚言を云ふのが彼に利益だと思へば常に虚言を云つた。母は子供が正直になるように育てることに努力して來たが結局父親似になるのではないかと大變心配した。父親と云ふのはこの子が生れた當時家出した。アルコール中毒で虚言つきの爲に全く信用がなかつた。母親は子供が父親似になるのではあるまいかと極端に心配の餘り、實際その子が虚言を云はなかつた場合にもその子供が關係して居りさへすれば虚僞があるように思つた。その子供の云ふ所はすべて眞僞を確め、ほんの少し眞實からかけ離れて居てもきびしくその責任を問ふた。

虚言を云ふより外仕方ないような狀態に子供を追ひやることが少なからずあるが。あれは結果がよくない。子供は餘義なく虚言を云はされたと感じ屈辱と復讐を思ふ。次のようなのが子供に取つてすつと宜しい。子供は眞でも虚言でもどちらでも自由に取れるんだが經驗に依ると虚言が成功しない。そして又强ひてやれば自分の不利益になると云ふことを子供に體驗させることだ。

兩親は特に子供が心身共に成熟してないことを利用して自分の子供にした約束を無視するようなことをしないよう注意する必要がある。親が最小の努力で子供に云ふことを聞かせようとして試みる些細な嘘でも子供はよく記憶して居る。例へば若し齒醫者に初めて行く時、動物園に動物を見に行くのだとか、伯母さんを訪れるのだとかその他子供がうれしい期待を持つて待つような

ことを云つてつれて行く。所がちやんと齒醫者の所に來てしまふ。痛い目に遭ふ。齒醫者と母親に怨みを抱く。これが次の場合大變な厄介なものになる。

醫者、巡査、犬などを以つておどして云ふことを聞かせようとしてはならない。こんな脅しは一度や二度は有效だが直ぐ子供は、醫者は一般に親切で巡査は罰するよりも保護して呉れ、犬はよい遊び友達であることを知るに至る。更に兩親の言葉は信賴出來ぬことを知る。又他人をこの手段で脅すことに依て優越の感じを得ることを覺へる。そして自分の兄弟や近所の遊び友達にこの手を用ひるようになる。このようにして子供を欺すと子供の兩親に對する愛を破壞するのみならず、模倣して、餘り望ましくない習慣を子供が得る。

何でも始終罰したり、餘り嚴しく罰したり不相應な罰などを自己を防ぐ手段として虚言を吐かせるに至る。多くの子供は罰を逃れようとして本能的に虚言をつく。特に罰が餘り嚴し過ぎる時とか、子供が自分は正直で何もかも云つて了つたのに斟酌して呉れなかつたと感じた時など。

最も善い最も理想に適つた確かな方法は虚僞のない環境に子供を置いてやることである。幼兒時代では、子供が眞實である習慣を作るには美・眞理の價値を抽象的に敎へ說いても力ないものだ。ある結果に眞正直にぶつかるよりは虚言をついた方が容易だと云ふので虚言の習慣を子供が

得るようになることを兩親はさけなければならぬ。子供の虚言は家族の人々の自己欺瞞或は虚言を模倣することから起る。いつでも頭痛でごまかしたり、好しくない人が尋ねると留守だと斷つたり、家族内で兩親が互にかくし合つて、「お父さんに話したら駄目よ」とか「お母ちやんに云つたらいけない」とか云つて子供に口留する。こんなことはすべて子供に、虚言は新しい未だ試みたことのない難しい狀態に在つては有效な手段であると云ふ考を植ゑつける。

眞を語るは努力に價し、人々の賞讃を得、更に物質的快を加へることを子供に敎へることは困難でない。即ち眞實を語る環境を子供に與へ虚言は結局不利益となることを子供に示すことに依てこのことが完成されるであらう。

第八章　云ふことをきかぬ子供

子供が從順であるか否かは當の子供の性質よりも寧ろ周圍の人々の取り扱ひ方によるように思はれる。若し行爲の目標が子供不相應に餘り高い所にあつたり或は到達點が餘り遠い所にあると努力しても無益のように思はれる。親達が子供を從順ならしめようとして取る手段は往々反て不從順を招くことがある。

屢々親が子供に用事を云ひつける、そして親の方が云ひつけた用事を忘れて終つて出來たかどうか注意さへもしない。

子供が玩具に氣を奪はれて遊んで居る、或は新しく買つて貰つた繪本を一生懸命見て居る。母親は臺所で熱心に水仕事をしながら大して必要でもない用事を大聲で云ひつける。子供も別に注意もしない、母親も忘れて終ふ。こんなことが度重なると、子供は自分が云ひつけをきかなかつた用事は母親も忘れて終ふものと敎へ込まれることになる。

こうして云ひつけられた用事をやらなくても問題にならなかつた、所が今日は母親が水仕事をわざ〳〵やめて叱り罰するとする、子供は一體どうしたらよいのか迷ふだらう。

こんな首尾一貫しない躾方をすると子供は自分の氣分の向くまゝに云ひつけに從つたり或は從はなかつたりするようになる。

すかしたり脅したりしても云ふことを聞かない。すると「いゝ子だからこれをして頂戴、出來たらお菓子を上げるよ」とか「も一寸靜にして頂戴、そしたらお錢を上げてよ」と云ふことになる。すると子供は報酬がないと云ひつけを聞かなくなる。頑張れば頑張る程獲物が大きくなる。「云ふことを聞かぬと巡査さんがつれて行く」とか「お化がさらつて行く」とか云つて脅かすの

はよくない。子供が甚しく恐怖を感じたり臆病になつたりする。或は少し大きくなるとお化も巡査もほんとは恐るべきものでないものが判り、今度は反てこれ等を利用するようになる。例へば醫者を恐れて居るように見せかけて身體を診察して貰ふ時泣き叫んだり身もだえして大騒動をする。

子供を取りあつかふ時に重要なことは正直と云ふことである、いくら正直でも正直過ぎると云ふことはない。子供が親に對する信頼の念が親の不注意により破られたら子供の世界に支柱がなくなる。父母の云ふことが眞實でなかつたら何を信じてよからうか。

ある小さな子供が齒醫者の所で甚しく痛い目に會つたが目に涙を浮べながらもじつと堪へた。が二度目は決して行かうとしない、それで母親が「今度は決して痛くない」と請け合つた。母親がそれ迄嘘を云つたことがなかつたので母の言葉を信じて行つた。所が前とはもつと痛かつた。こゝに母親に對する信頼の念がぶち壞された。そして新しい狀態は恐怖を感じ、不安を示し、母親の云ふことに信用をおかなくなつた。數ケ月後齒醫者に行かなければならなくなつた。子供は齒を抜くのかと尋ねる。否や今日は抜かんでも宜しい、若しその必要があれば次の日に痳醉して抜くから恐れなくとも宜しいと云つて聞かせた。子供はよく判つた。然し實際齒醫者の手術椅子

に腰かけた時すつかり怖ろしくなつてどうしてなだめても到底駄目だつた。決して今日は痛くないのだと幾度なだめても「この前痛くないと云つたのに痛かつた。家へ歸へろう。齒に觸つちゃ嫌だ」と云つてきかない。

又子供を扱ふ場合子供の動機理由をよく見てやる必要がある。一見兩親の云ひつけにそむいて居るように見えることも眞實は父母の手助けをしようとして居ることがある。

四歳になる女兒、幾度も〳〵水遊びをしてはいけないと敎へられて居たがある時臺所で濡れ鼠となつて居るのを見つけられた。そして大に罰せられた。が後で判つた。母のふき掃除のまねをしようとして水をはね、ぬれ鼠になつたことが判つた。

又ある子供が庭の植物を引き抜いてはならんと敎へられて居た。ある日父親が花壇の雜草を抜いて居るのを見て居た。二三日後その子供の父親の手助をするつもりで短い花の苗を引き抜いた。殘つたのは長い雜草のみであつた。

成人はよく子供の肉體にはとても不可能と思はれるような束縛を與へようとする。「靜かに、おとなしく」等云ふのは易いが、元氣に滿ち〳〵た健全な小さな子供には十分も二十分も靜かにして居ることは出來ない。小さい子供の新しい筋肉は常住成長し發達して居る。だから走つたり跳

んだり叫いたり遊戯したりして居なければならない。自然の要求なのである。出來得れば家か庭の中に彼等が何等の制限、危險を受けない場所を一ケ所作つてそこで思ふ儘遊ばすとよい。

若し從順の習慣を作らうと思へば先づ親たるものはその子供をよく學べ、子供は何を考へ、如何に反應するかを知れ。

よく考へ拔いた揚句少しの命令を與へよ。然らば實行される。命令するだけの價値ある命令は實行される價値があるものである。餘り專横な峻嚴な態度であつてはならぬ。子供は成人同樣に壓制に反感を持つ。

子供の注意を引け、然る後命令を簡單明瞭に云へ。更に出來得れば、その必要な理由を說明せよ。たゞ理由ある用事のみ命令される經驗を得た子供は云ひつけられたら直ぐ實行するに至る。

子供の興味を得よ。要求された行爲の價値を示してやれ。用事を完成したことに興味を持つてやれ。

云ひつけは消極的であつてはならぬ、積極的でなければならぬ。「してはいけない」と云ふのでは駄目「こうしなさい」式が宜しい。禁じた行爲から注意をそらし他のものに集注するような暗示を與へよ。

約束する前に、篤くと考へよ。一度約束したなら守れ。或は不履行の場合はその理由を說明せよ。信用を破るな。

態度一定たれ。規則を作れ。一度禁止したことはいかなる場合も許すな。かくすれば子供にはある行爲の賞罰がはつきりする。

よく褒めてやれ。その努力を認めてやれ。不從順である時にのみ大人の注意を向けて貰へる子供が多い。親の要求は正しい理由があるのだから、親の云ふことをきくと賞めて貰へるから、ろれしいから從ふと云ふように躾けなさい。物が貰へるから從ふと云ふような躾方はいけない。

就中、從順を期待せよ、用事を云ひつけたものゝ子供が從ふだらうか、或は多分從はないだらうと親が思ふてはならぬ。子供は直ぐ感ずる。誰でも自分に期待された樣に生活しようとする。特に子供はそうである。

昭和十一年七月九日第一版發行
昭和十三年二月十日第二版發行
昭和十四年十一月十五日第三版發行
昭和十六年四月十五日第四版發行

【定價　金二十錢】

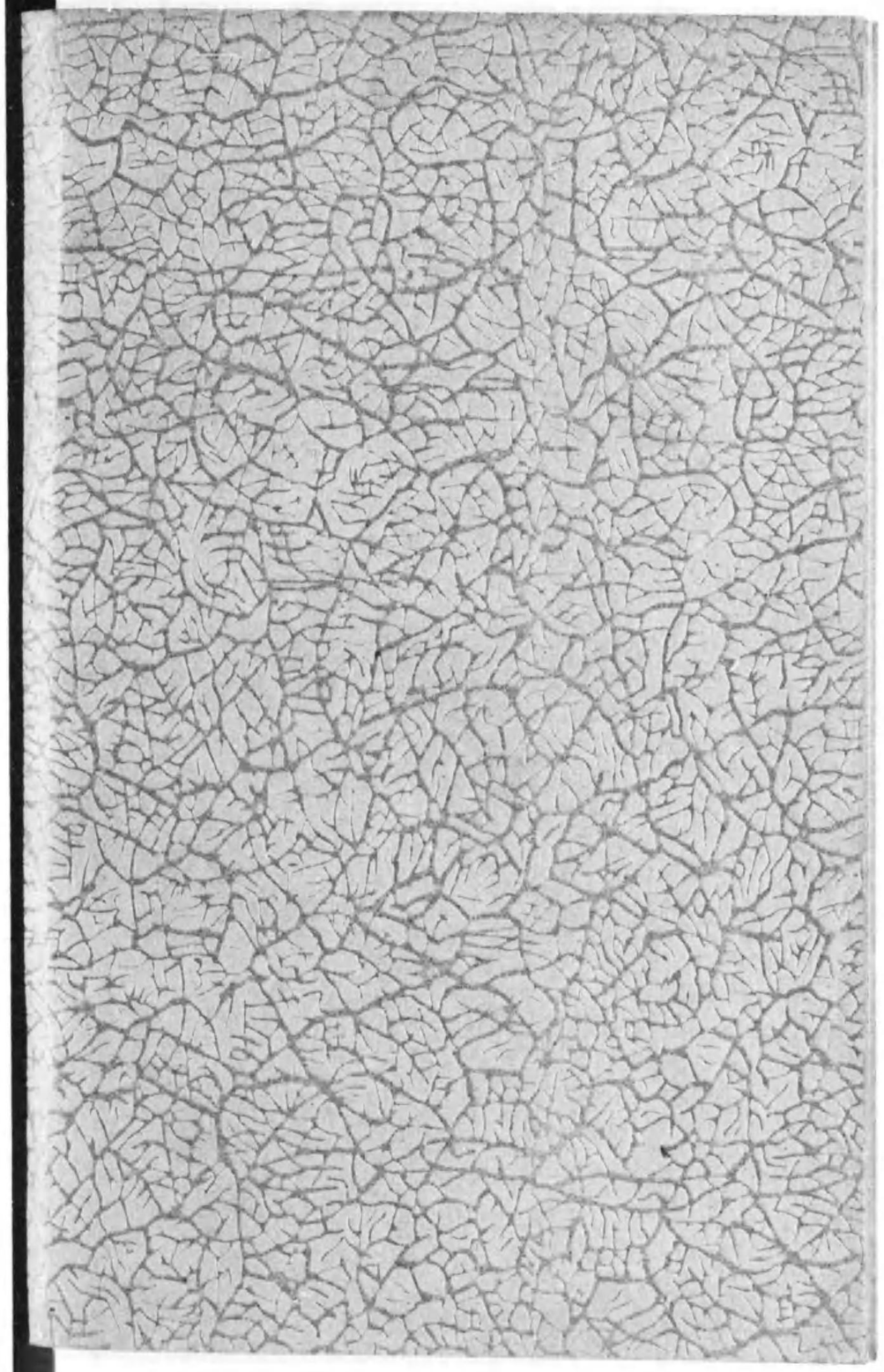
編輯者　京都市兒童院

發行者　京都兒童院內
兒童院母の會代表者
石川謙一

印刷者　京都市中央卸賣市場甲二七號
中西勝太郎

印刷所　京都市中央卸賣市場甲二七號
中西印刷合名會社分工場
電話下⑤一四〇二番

發行所　京都市兒童院內
兒童院母の會

415
384

終